



富山大学理学部同窓会

雪紋

富山大学理学部同窓会報 2026 Vol.45

富山大学理学部同窓会 雪紋

<http://www3.u-toyama.ac.jp/alumni4/>



富山大学理学部同窓会 雪紋

年次総会・記念講演会 2026

2026年7月25日(土) 12:30~

会場：富山大学 金森産業ホール（講演会サテライト会場：スギノマシンラウンジ）

12:30~13:00 年次総会 会場：金森産業ホール

14:00~15:00 記念講演会

『「小説」×「科学」—私の創作活動—』

第172回 直木賞受賞

講師 伊与原 新 氏（旧教員・助教／特別会員）

プロフィール

1972年、大阪府生まれ。神戸大学理学部卒業後、東京大学大学院理学系研究科で地球惑星科学を専攻。博士課程修了後、2003年から2011年まで富山大学に勤務。2010年、『お台場アイランドベイビー』で横溝正史ミステリ大賞を受賞し、デビュー。2019年「月まで三キロ」で新田次郎文学賞、静岡書店大賞、未来屋小説大賞を受賞。2023年刊行の「宙わたる教室」は第70回「青少年読書感想文全国コンクール」の課題図書（高等学校の部）に。また2024年10月よりNHKにてドラマ化され好評を博した。2025年「藍を継ぐ海」で直木賞を受賞。近著に「翠雨の人」「コズミック・ガール 宙わたる教室」。



本会場：金森産業ホール サテライト会場：スギノマシンラウンジ

対象：雪紋会会員とその家族、富山大学に在籍する学生、教職員
（同伴者は1名まで可）

参加費：無料

※金森産業ホール、スギノマシンラウンジは富山大学五福キャンパス学生会館内にあります。

15:30~17:30 懇親会 会場：生協 JOPS 食堂

対象：雪紋会会員 会費：5,000円

申込方法

二次元コードを読み込み フォームよりお申込みください。➡

申込締切 7/15(水)

本会場の定員は約150名で、先着順となります。
お早めにお申し込みください。



お問合せ先：富山大学理学部同窓会 雪紋 事務局
Tel 076-411-4803
✉ alumni4@sci.u-toyama.ac.jp

主催：富山大学理学部同窓会 雪紋
共催：富山大学理学部



巻頭言	写真フォルダに残る4年間	市村美紗稀	11
五福キャンパスのユリノキ	気づけば4年	遠藤 颯太	12
同窓会会長 水島 俊雄			2
着任のご挨拶	懸賞付きクロスワード・パズル		14
			3
退職のご挨拶	事務局通信		16
人生は運と縁	会員情報		
永井 節夫	活動報告		4
退職に当たって — サンプルたちへの鎮魂歌	理学部キャリア・デザイン講座 2025 支援		
横畑 泰志	富山大学理学部同窓会 2024 年度研究助成報告書		6
第18回サイエンス・フェスティバル 2025	2025 年度 理学部同窓会役員・活動委員会名簿		
リーダーの在り方	2024 年度 理学部同窓会会計決算報告		
安澤 大地	年会費の納入状況を確認する方法		8
伝えるということ	富山大学基金だより		31
松田 暁里			9
キャンパスを振り返って	異動届ハガキ		33
出会いに支えられた4年間			
木南 彩	編集後記		35
多くのつながりに支えられた卒業研究			
加藤 聡	富山大学アルムナイプラットフォーム		36
			10

五福キャンパスのユリノキ

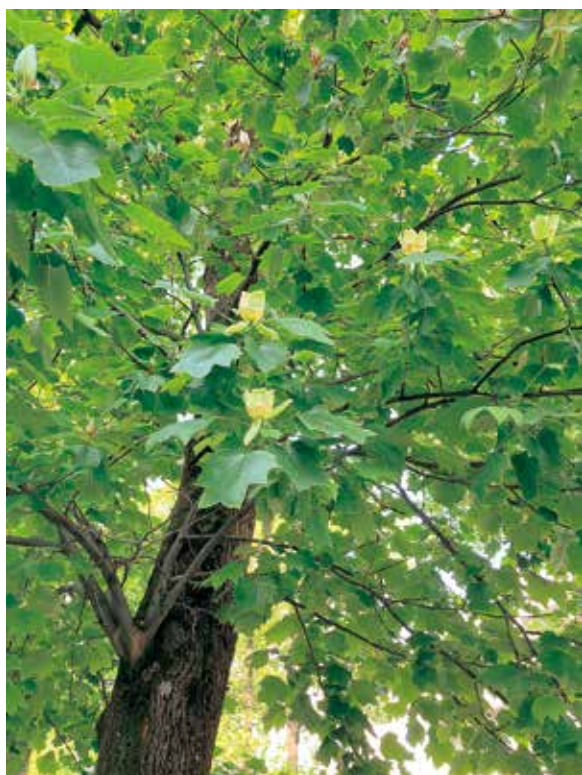
同窓会会長 水島 俊雄（S49 年 1974 年、物理学科卒）



五福キャンパスのユリノキはメインストリート沿いに整然と立ち並んでいます。この並木が五福キャンパスを代表する木でしょう。ユリノキは私達が学生の頃から比較にならないほど幹は太くなり、背丈も伸びています。これが春になると薄い緑の大きな葉を付けます。大学の木というといちょうの木が代表的かもしれませんが、五福キャンパスはユリノキです。このユリノキは初夏になると筒状の淡い黄色の花を咲かせてくれます。ユリノキは別名チューリップツリーと呼ばれるそうで、花の形からチューリップを容易に想像でき、別名はしかりと思わせてくれます。木は背丈がありますので目を上にやらないとこの花には気が付きません。私はこの花を見るときもうすぐ夏がくると感じます。

ところで富山大学の五福キャンパスにユリノキを植えることになったいきさつについては同窓会誌「創立 40 周年記念誌」に生物学科におられた名誉教授小林貞作先生が詳しく書いておられます。小林先生はこのユリノキについて「わが選定に悔いなき思いと感激を覚える」と言っておられます。古い卒業生が五福キャンパスを訪ねて来て、背丈が高く、幹が太くなったユリノキを見てびっくりすると

言います。4 月になり理学部新入生の保護者懇談会が多目的ホールであります。その場で理学部案内の映像を見るのですが、このユリノキの並木が画面いっぱいになった映像が流れます。4 月当初ユリノキはまだこの映像ほどではありませんが、細い枝から小さい葉が出ている状態で、やがて映像のような緑一杯になったユリノキになるのだらうと皆さんは想像するのでしょうか。また、新入生を勧誘する部やサークルの看板がこの木々に沢山立て掛けられ、構内を華やいだ雰囲気になさしてくれます。それを思うと五福キャンパスはユリノキの並木でいいと思うのです。このユリノキは大学正門の近くから 1 期、2 期、3 期と植樹されたそうで理学部前の木々は経済学部前と比べるとまだ樹高は低く、成長の遅い木もありますが、今後の成長が楽しみです。これまで多くの学生達が将来の事やたわいもない事を語り合ってきたように、これからも若い多くの学生達がこの木の下を行き交うのでしょうか。富山大学理学部同窓会 雪紋は今後も新しくなった理学部を、そして学生を応援していきます。



ユリノキの花（2026 年 5 月 19 日 編集部撮影）

着任のご挨拶



水素同位体科学研究センター
助教 小濱 望

2025年6月付けで学術研究部理学系の助教に着任しました、小濱望と申します。所属は化学科・水素同位体科学研究センターになります。

私は、分析化学を専攻し水中の呈色させた目的物質を粒子に吸着させた固相抽出の原理を用いた高感度な簡易比色分析法の開発という研究で本学、倉光秀樹教授の研究室で博士の学位をいただきました。修了後は、民間の半導体企業で製造エンジニアとして2年間勤務してまいりました。

本学に着任後は、水素同位体科学研究センターの阿部孝之教授のもとで新しい微粒子表面修飾技術を用いて新規な水素製造用高機能材料の開発を行っています。開発した高機能材料の二次成型手法の確立や特性評価を行い、水素をクリーンに量産できる技術の開発と実用化を目指した応用研究に力を入れています。昨今、地球温暖化対策に伴い、クリーンエネルギーである水素が着目され、水素の大量製造の早期の実用化が求められています。このような社会のエネルギー問題に貢献できるように精力的に研究を行っていきたいと思います。まだまだ教員、研究者として至らない部分が多々ありますが若手教員として、この富山大学で研究や教育に貢献していけるよう精進して参ります。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

令和9年版名簿発行のお知らせ

このたび、令和9年版同窓会名簿を発行する運びとなりました。

「安全」「正確」なデータ管理のため、同窓会を総合的にサポートする専門会社(株)サラトに業務を委託しています。同社より確認はがきや名簿購入の案内を発送して作業を進めてまいりますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

- 名簿発行日：令和9年3月下旬
- 体 裁：A4判（約370頁）
- 名 簿 価 格：5,300円（送料・税込み）

名簿作成委託先

株式会社サラト(兵庫県姫路市)のホームページ

<https://salat.co.jp/>

人生は運と縁

富山大学 学術研究部（理学） 教授 永井 節夫

2000年4月1日（土）富山大学教育学部自然生活系数学教育専攻幾何学担当助教授として着任いたしました。4月3日（月）10時30分に学部長室で辞令交付式があり、塚野州一学部長（心理学）から辞令を受けました。当該ポストの公募締め切りが1999年11月30日（火）、泉野佐一教授から内定通知を受け取ったのが12月24日（金）のことでした。2000年1月26日（水）午後5時から、教育学部長室で面接を受けました。面接の場には、塚野州一学部長、泉野佐一教授（数学）、浅沼照雄教授（数学）、浜名正道教授（数学）、山下正人教授（技術）、清水建次教授（物理）が同席されていました。なごやかな雰囲気の中で面接を受けたことを憶えております。非常に多数の応募があったと伺いました。なぜ私が選ばれたのか？運が良かったとしか言いようがありません。またご縁があったとしか言いようがありません。着任前年の1999年度当時、富山大学には、理学部に渡辺義之教授、古田高士助教授、教育学部に岡安隆助教授がおられて、いずれも学会で名前の聞こえた有名な微分幾何学者でした。そのような錚々たる研究者の中に加わるには私はあまりにも役不足と申しますか、分不相応な気持ちでいっぱいでしたが、頑張っていくと引き締まりました。

着任後ほどなくして、渡辺義之先生から研究室に電話がありました。「東川和夫教授があなたに用事があるから、電話をなささい。」という事でした。早速東川先生に電話を入れると「韓国の慶北国際大学の徐泳鎮教授があなたを呼びたいと言っている。あなたは微分幾何の分野で良いお仕事をされているみたいだから、徐教授に連絡を取りなさい。」という電話でした。そこで早速徐教授にメールを入れました。その結果2003年12月11日（木）から12月14日（日）に訪韓して、12月12日（金）と12月13日（土）に第8回微分幾何学国際研究集会において研究発表をしました。この機会に導いてくれたのは東川和夫教授で、これも縁としか言いようがありません。研究発表を終えた後、非常に立派な紳士の方が近づいて来られて、日本人よりも美しい日本語で話しかけてきました。微分幾何学の有名な研究者で大韓学術院議員（日本で言う所の学士院会員）の奇宇恒先生でした。その時、先生は紙に「今こういう問題を考えていますが、ご興味はありますか？」と問われ、私としては、幾分社交辞令の気分もあって「面白そうな問題ですね。」と答えました。その夜は奇先生に誘われて、非常に豪華な韓定食をご馳走になりました。日本に帰国すると、間もなく研究室に電話がありました。出て見ると韓国からの国際電話でした。相手は奇先生でした。「研究の事でご相談があります。計算用紙を郵便で送りましたから、見て下さい。」と言う電話でした。これが奇宇恒先生との共同研究の始まりでしたが、奇先生と知己を得たのも運と縁としか言いようがありません。後日60ページに渡って、

ぎっしりと手書きの計算が書かれた研究ノートが送られてきました。テンソル解析学の大家の手書きの研究ノートはめったに目にすることが出来ないものです。すでに印刷になった論文と違って、生の息吹が感じられます。所々に書き直しや、書き込みが入っていて、数学は人間が作っているものだという事を体感できる貴重なものです。先生のノートを読むことによって、教室で習うのとは全く密度の違う勉強をさせてもらいました。計算に対する、さらに研究に対する、情熱と体力と気力を吹き込んでもらったと感じています。奇先生とは研究を通じて7編の共著論文を書きました。奇先生との研究交流では、私が訪韓したり、先生が訪日したりしましたが、その中で、千葉大学の高木亮一先生と直接研究交流をするご縁を得ました。高木亮一先生は、微分幾何学の大家ですが、特にE. Cartanに端を発する球面内の等径超曲面の研究をリードされていた研究者の一人で、高橋恒郎先生とともに、等質な等径超曲面の形作用素の固有値、いわゆる主曲率とその重複度を全て決定し、また私が専門とする複素射影空間内の等質実超曲面の完全分類を与えるなど、非常に優れた業績を持つ数学者です。奇先生を通じて、そのような雲の上の大家と直接研究上の関係が出来たという事も縁としか言いようがありません。直接の触れ合いでは、本や論文で読むのとは比べ物にならない影響を受ける事が出来ます。やはり、数学は人間がやっているのです。奇先生の時と同様に、高木先生の手書きの研究ノートに触れることが出来たのは得難い経験でした。高木亮一先生とは3編の共著論文を書きました。

順序が後先になりますが、私の先生である埼玉大学名誉教授の奥村正文先生の事はどうしても書かなければなりません。一度は数学に挫折した私を拾ってくれて温かく研究指導をして下さいました。博士論文を仕上げる3年間お世話になりましたが、当時奥村先生は学部長という激務を担っておりましたが、その様な中で、毎週月曜日午後の2時間は必ず博士課程の研究指導の為に時間を作って下さいました。大学の教員になってみて分かることですが、これは大変な事です。ゼミで先生に会うと、それだけでとても元気になり、幸せな気持ちで学校から帰るという毎日でした。本当に良い先生とは、こういう先生の事を言うのだと思います。先生は「私は、協力もしないけど、邪魔もしない。」とおっしゃっていましたが、これは先生一流のエスプリで、実際はこの上もなく協力して下さいました。私が博士論文の主結果となる論文を書き上げた時に、「Vanheckeに送ってみろ。」と先生は仰いました。ベルギーのルーヴェン・カトリック大学のLieven Vanhecke教授の事です。早速プレプリントを送った所、赤字でびっしりと丁寧な英語も含めて添削されたプレプリントが送られてきました。また、その中には、「この空間とこの空間は主曲率と重複度は同じだか、位相的には全く別の空間だから、その事の区別を

明確にしてください。」と言う本質的に有益なアドバイスが、書いてありました。奥村先生を通じて Vanhecke 教授と研究交流が出来たのも縁としか言いようがありません。

さらに、遡って、そもそも私を人生の様々な局面で数学の世界に繋げて下さったのは、中央大学名誉教授の松山善男先生です。19歳の時に学生相談室に訪ねて、将来数学の専門家になりたいのだけれどと相談に行ったときに対応してくださったのが松山善男先生でした。そのときの先生の言は「やめといた方が良いでしょう。苦しいから。」と開口一番おっしゃったのですが、その言葉を継いで、具体的には今から何をしておいたら良いとか、修士課程での心掛けとか、博士の生活はどのようなものか、など、今思い出してみても極めて適格なアドバイスをして下さいました。先生も人間が大好きで、学生をとて可愛がる良い先生でした。松山先生とは19歳の当時から65歳の今まで、何と46年間も交流が続いています。

かつて、矢野健太郎先生の所で奥村正文先生は助手をされており、その当時に奇宇恒先生は韓国から矢野先生の所に留学をされており、奇先生は高木亮一先生と親しくなり、松山善男先生は高木先生のおられた教育大のセミナーに出席されており、奥村先生は Lieven Vanhecke 先生と研究交流をされ、そうした様々なつながりの先に私も縁を受けました。本当に人の縁とは不思議なものです。

履歴書をたどって自分の経歴を眺めると、富山大学に

来てから何と6回も肩書が変わっています。それだけたくさん組織改編が行われたという事です。論文を書くとき一体自分の所属を何と書けば良いのか。時々分からなくなってしまうほどです。理学部に移ってから数学科長を3回やりました。2015年度、2020年度、2021年度です。2020年度には2月に横浜港停泊中のダイヤモンド・プリンセス号でコロナ感染が蔓延して、たちまち日本国中のみならず世界中がパンデミックに陥りました。その結果、オープンキャンパスが対面で開けなくなって、チューリップテレビのクルーが大学に来て、模擬授業の動画を取りました。これも稀有な体験でした。仕事の事はあまり書きませんでしたが、印象に残る事や苦しい事など数々ありました。ただ、本当に素晴らしかったことは、学生との出会いです。素晴らしい学生と数々出会い、共に学びました。

大学とはどういう場所か。私のイメージです。秋は枯葉を踏みしめながら、冬は冬枯れの中を、静かに歩みを進めながら思索を深めていく。教室では、学問を通じて思索を深めながら、学生と共鳴しあい、場と空気を共有する。共感と共鳴と感動を通じて学ぶ喜びを交歓しあう場所。ゼミでは、学生の学びを深め、高め、終わりにには学びが進んだ喜びをもって帰っていく場所。

長い間お騒がせ致しました。さようなら。

『永井節夫教授 最終講義の一コマ、2026年3月6日』



(写真提供 川部 達哉)

退職に当たって —サンプルたちへの鎮魂曲^{レクイエム}

富山大学 学術研究部（理学） 教授 横畑 泰志

2026年3月31日をもって、1991年10月1日から34年6ヶ月にわたって勤務してきた富山大学を定年退職しました。その後も大学から自宅などへの物品の搬出と不用品の廃棄に多大な時間を要し、1ヶ月近く経った現在でもほぼ毎日大学に通っています。

在職中は様々な哺乳類などの動物やそれらの体内に寄生する蠕虫類（条虫や寄生線虫などのいわゆる寄生虫）の研究を学生たちと一緒に続けてきましたが、こんなに搬出に時間がかかるのは、書籍や書類などに加えて、多くの標本や臓器サンプルを抱え続けてきたためでした。東京大学や京都大学、北海道大学などの一部の大規模な大学には大学博物館があり、退職教員の収集していた標本は引き取ってもらえますが、それでも退職した著名な教授の多数の標本が失われたり、学部で標本室が廃止されて数多くの標本が廃棄されてしまったりすることがあります。富山大学の様に博物館のない中小の地方大学では、教員は退職時に外部の施設に標本を寄贈することが普通ですが、それには寄贈前に標本を十分に整理しておく必要があります。動物の簡易剥製（厚紙を入れて作った平面的な剥製標本）や骨格標本（多くは頭骨）は各地の、できるだけ産地に近い地域の博物館に寄贈し、寄生虫の液浸標本は有名な目黒寄生虫館などに引き取っていただく予定で、今後数年をかけて整理していくことになるでしょう。特に富山県内で駆除されたイノシシの頭骨標本（写真1）は数百点に及びますが、富山市科学博物館に寄贈を申し出たところ、快く引き取っていただけました。

しかし、最大の問題は寄生虫の検出作業以前の、冷凍または液浸の大量の臓器のサンプルでした。富山大学に赴任する前に関わっていた北海道産のエゾシカ50頭の腸管に加えて、多数の富山県産イノシシの肺、心臓、肝臓、胃、小腸、大腸などの内臓をホルマリン液浸標本として蓄積していましたが、一部を除くと最終的には活用できなかったために、やむなく廃棄せざるを得なくなりました。通常の研究ではモグラやネズミなどの小型哺乳類を扱ってきたので、サンプルの保存にもあまり空間を要することがないのですが、こうした大型哺乳類の場合、しばしば一つの部屋が一杯になるくらいの量になってしまいます。今回は、写真2のような密閉容器で50本以上の量になりました。昨年の夏までは総合研究棟のベランダをお借りして安置していたのですが、9月くらいからホルマリン液と中身を分離して、液は実験廃液、中身は有害固形廃棄物として環境安全推進センターに引き取っていただく作業を始めました。有害固形廃棄物は通常センター内の冷凍庫で一時保存され、冷凍庫の容量で引き取り量が制限されるのですが、幸いホルマリンで固定されているので、密閉容器に入っていれば冷凍庫に入れる必要はないということになりました。ホルマリン液は激しい刺激臭を放つので、ドラフトの中で

作業を行います。私の実験室にもドラフトはあるのですが、同じ室内で行っているモグラの行動観察実験への影響が懸念されたので、自然環境科学科の学生実験室のドラフトを使わせていただきました。密閉容器の中身を、底にたくさんの穴を開けた容器の中に入れて数時間～一晩ほど置き、ホルマリン液を下に落として分離し、センターに引き取ってもらう作業をすべて終わった頃には11月後半になっていました。その後も1ヶ月に一度、決まった分量しか回収してもらえないホルマリン液の搬出が続き、ほぼすべてを終わって他の物品の搬出作業に本格的に取り掛かり始めたのは2月頃のことになります。有害固形廃棄物の引き取りは有料なのでかなりの経費がかかり、今年の私の研究費の多くがそれに費やされました（幸い外部資金が多少あり、学生・院生の研究にはほとんど支障がありませんでした）。

このように書いてしまうと単なる苦勞話で終わってしまいますが、本来こうしたサンプルは貴重な研究資料となるもので、時間をかけて処理していけばそれなりの成果が得られたはずですが、イノシシの体内に寄生する蠕虫で言えば、長さ10 cm以上、太さ5 mmくらいの大型の線虫であるブタカイチュウ *Ascaris suum*（写真3）や、それより小さくても肺の細気管支などの中にいて見つけやすく、肉眼でも十分に検出できる肺虫類（ブタハイチュウ *Metastrongylus elongatus* など4種）などは日本各地でしばしば報告されるのですが、それに対してイノシシの大腸に寄生する小型の線虫、*Morgascardia kugii* は長さ約1 cm、太さ0.5 mm程度なので見つけるのは難しく、非常に検出例が少なく、私の知る限り和歌山県からの Sato et al. (2008) の一例のみで、この論文によって新種記載されています。もし今回廃棄したサンプルを十分な時間をかけて精査できていれば、世界で2例目の報告ができたかもしれません。イノシシのサンプルも廃棄の容易なアルコール液浸にしていたごく一部は残っていて、今後時間をかけて調べる予定ですが、この線虫の感染率はかなり低いようなので（和歌山県の例で20頭中1頭）、見落としも多いでしょうから、見つかる確率はあまり高くはありません。

また、私の扱うサンプルは必ず動物の命を犠牲にして得られています。イノシシの場合は狩猟者が害獣として駆除した個体を利用するので、自分で命を奪うわけではありませんが、それでも自分が関わった動物の死であることに変わりはなく、さらにモグラやネズミたちの場合は研究や教育活動のために自ら数多く死に至らしてきました。こうした仕事をしている研究者は、動物の死体を活用して研究を行い、論文などの成果を出すことで、犠牲となった動物の死に報いることができたという意識を持つことが多く、私もその例外ではありません。逆に成果が出せないと、動物の命を無駄にしてしまったと後悔の念を抱くものです。モグラやネズミ、さらには中型のタヌキやハクビシンなど

の内臓サンプルは自宅に持ち帰って今後活用していく予定ですが（車庫がちょっと大変なことになっています；写真4）、今回の搬出作業の中でしばしば容器のラベルが剥がれていたものに何度も遭遇しており、知らぬ間に冷凍庫が故障して融解、腐敗していたりして利用できなくなってしまうこともあって、その度に心の中で手を合わせずにはいられませんでした。

さて、そのように収集してきた動物の内臓サンプルの中で最も数が多いのは、イノシシでもモグラでもなく、実習のために呉羽丘陵で毎年捕獲してきたアカネズミです。教養部時代の「生物学実験」、教育学部時代の「環境生物学実験」、理学部時代の「生物圏環境科学実験Ⅲ」および「自然環境科学実験Ⅲ」を通じて1997年～2025年の合計捕獲頭数は657頭に及びます。一部冷凍庫の故障やアルコール液の蒸発などで紛失したものもありますが、定期的に捕獲された600頭近い冷凍またはアルコール液浸の内臓がほぼ毎年残されているので、体内の蠕虫の個体数変動と宿主の個体数変動（捕獲数／使用わな数で推定）の関係を経時的に分析できないかと期待しています。特に小腸を中心に見られる線虫の一種、*Heligmonoides speciosus* は宿主1個体あたり数百から時には1,000虫体以上が寄生しており、消化管を解剖して虫体を拾い集めて数えるのは何年も

かかりそうですが、大変やりがいのある仕事になるでしょう。このアカネズミを用いた実習を紹介した上で、教育研究機関で用いる個々の動物個体を研究や教育のできるだけ様々な目的に複合的に利用して、最終的に消費される個体数の減少をはかる「動物の多面的利用」は動物福祉において大きな意義があると論じたことがありますので（横畑、2010）、後には引けない状況でもあります。定年退職という大きな転換期でやむなく廃棄せざるを得なかったサンプルは数多くありますが、その引き換えに現役時代では望むべくもなかった、多くの自分で研究できる時間をできるだけ活用して、これからも動物たちとの付き合いを続けていきたいと思っています（写真5）。

引用文献

Sato H., Suzuki K., and Yokoyama M. (2008) Visceral helminths of wild boars (*Sus scrofa*) in Japan, with special reference to a new species of the genus *Morgascaridia* Inglis, 1958 (Nematoda: Schneidernematidae). *Journal of Helminthology* 82 : 159-168.

横畑泰志 (2010) 学校教育の現場における野生動物福祉. *日本野生動物学会誌* 15 : 25-29.



写真1. 富山県産イノシシの頭骨（物差し長さ約17 cm）



写真3. 富山県産イノシシから検出されたブタカイチュウ（左上が雌、右下が雄、シャーレの格子幅1 cm）



写真5. 自宅の机の上に設けた「仕事場」



写真2. 内臓サンプルの保存に使っていた密閉容器（高さ38.6 cm）



写真4. サンプル容器などがひしめき合う自宅の車庫

リーダーの在り方

第 18 回サイエンスフェスティバル実行委員長 化学科 3 年 安澤 大地

2025 年 9 月 20 日と 21 日に、理学部棟にてサイエンスフェスティバル 2025 を開催いたしました。今年度は両日合わせて 2295 人の方々にご来場いただき、昨年と同水準の盛況ぶりとなりました。

サイエンスフェスティバル（以下：SF）を知らない方のために、初めに SF がどういった団体でどのような活動をしているのか説明いたします。SF とは、理学部と都市デザイン学部地球システム科学科の学生が主体となり、例年 9 月下旬に開催しています。大学の地域貢献を目的としており、富山県内の小学生やその保護者様を中心に、科学の面白さや楽しさを体験的に感じていただく一つの機会になればと思い活動しています。18 年目となる今年度は、『世界は不思議であふれてる～君だけのオモシロイを発掘しよう！～』というスローガンを掲げ、数学・物理学・化学・生物学・自然環境・地球科学といった幅広い分野について子どもたちに興味を持ってもらうイベントとなるよう、実験ブースの設営や企画立案、広報活動などを行いました。また、昨年度に引き続き教育学部のブースも出展し、ご参加くださった皆様により一層楽しんでいただける内容をお届けできたと感じております。

今回の経験を通して、私は「リーダーとは何か」という問いに改めて向き合うことになりました。これまで私は、誰よりも優れ、常に正しい判断を下す存在こそがリーダーにふさわしいと考えていました。しかし実際には、一人で背負うのではなく、周囲を信頼し、組織として前に進む姿勢こそが重要であると気づかされました。リーダーとは完璧な存在ではなく、弱さや迷いを抱えながらも決断し、周囲と共に進む存在であると学びました。

私が思う「委員長のあり方」は、全体を見渡しながらかる確な判断を下し、委員を安心させられる存在です。これまで見てきた先輩方の落ち着いた姿に憧れ、私もそのように組織を支えたいと考えていました。しかし実際には、自分一人で抱え込むことで視野が狭くなり、結果として周囲に負担をかけてしまう場面もありました。特に印象に残っているのは、資料修正や事務連絡が重なり、手が回らなくなった時のことです。疲弊しながらも抱え続けていましたが、思い切って委員に相談したところ、すぐに役割分担をしてくれました。そのとき、仕事量だけでなく精神的にも大きく支えられました。この経験から、リーダーに求められるのは「何でも一人でできる力」ではなく、「周囲を信頼し、適切に任せる力」であると学びました。

また、メンバーを動かす難しさも強く実感しました。単に「期限までに提出してほしい」と伝えるだけでは十分ではなく、その作業がなぜ必要なのか、どのような意味を持つのかを丁寧に説明することで、初めて共通認識が生まれるのだと気づきました。伝えることの重要性和難しさを学んだ一年でした。

年度を通して、自分が理想とする委員長像を体現できたとは言え、多くの反省が残っています。情報共有が不十分であったことで準備が滞った場面や、先生方との調整において事前確認が不足し、再検討を求められたこともありました。特に、判断や連絡の遅れによって提出期限直前に作業が集中し、実行委員に大きな負担をかけてしまったことは深く反省しています。3 年生が私と副委員長の 2 人のみという状況の中で、より広い視野と迅速な判断が求められていたにもかかわらず、それを十分に果たせなかったことは申し訳なく思っています。

個人的には至らなさや後悔が多く思い起こされる一年でしたが、当日は大きなトラブルなく終えることができました。それは各ブースの高い危険意識や、意見を率直に伝えてくれた実行委員の支えがあったからこそだと思っています。来場者の皆様からは「来年も来たい」「子どもの目線で丁寧に説明してくれた」といった好意的な言葉を多くいただき、イベントとしては一定の成果を残すことができました。この結果は、決して私一人の力ではなく、組織として協力し合えたからこそ生まれたものです。今回の経験を通して、私は「完璧であること」を目指すのではなく、「組織が前に進める環境を整えること」こそがリーダーの役割であると学びました。自分の弱さや迷いを受け入れながらも、周囲を信頼し、決断する。その姿勢を今後の活動や将来に活かしていきたいと考えています。

最後になりましたが、SF2025 に関わってくださった理学部同窓会・後援会の皆様、今井拓哉准教授及び学内の先生方、学務課・総務課の皆様にご心より感謝申し上げます。また、実行委員とブースメンバーをはじめとして、貴重な時間を割いて協力してくれた全ての学生の皆さんにもお礼申し上げます。そして、今年度露呈した課題や反省点は、来年度以降 SF を引っ張ってくれる後輩たちに引き継いでいきます。作業量や考えることの多さを辛く感じることもあるかもしれませんが、思い詰めすぎることなく楽しんで活動してもらえれば幸いです。1 年間、本当にありがとうございました。

伝えるということ

副実行委員長 自然環境科学科3年 松田 暁里

サイエンスフェスティバルは、理学の魅力を地域の方々に伝え、学生同士が学年や学科を越えて互いに学び合う貴重な機会です。私は本年度、副実行委員長としてこの「伝える」活動に携わり、運営全体の調整や入場者数の管理、会場全体の状況把握などに関わりました。

サイエンスフェスティバル当日、会場を見回っていると、展示の前で目を輝かせる子どもたちや、仕組みを理解しようと真剣に説明に耳を傾ける来場者の姿が目飛び込んできました。その光景は、私に理学の面白さを伝えることの楽しさと同時に、その責任の大きさを強く感じさせました。「伝える」ことは単に知識を伝達するだけではなく、「相手と好奇心や興味を共有し、一緒に学びを楽しむこと」なのだ実感したのです。また、この経験を通して、私自身も理学の面白さを改めて体感することができました。

一方で、運営の現場では「伝える」ことの難しさも見えてきました。実行委員会と各ブースとの情報共有や連絡の仕組みが十分でなかったため、準備期間から本番を通し、経験者の判断や暗黙の了解に頼らざるを得ない場面も多有りました。また、ブースの運営が特定の学年に偏ることもあり、知識や経験が個人で留まってしまうような状況でした。これでは、次年度以降に円滑な運営を引き継ぐことが難しくなると感じました。

そこで、2026年度に向け、ブースへの業務内容や役割

分担、連絡手順を整理したマニュアルを作成することになりました。このマニュアルは、単に運営を効率化するためのものではありません。知識や経験を次世代の学生に「伝える」ための道具であり、共通の指針を持つことで、経験の浅い学生でも安心して運営に参加でき、自ら考え行動する力を育むことにつながります。言葉として残すことが「学生同士で知識や経験を共有し、活動を継続していく」ために非常に重要なのです。

サイエンスフェスティバルは、学生が協力して一つのイベントを作り上げることで、かけがえのない経験と学びを得られる場でもあります。来場者の笑顔や驚きの表情に触れるたび、私自身も学ぶことの楽しさを再確認し、「伝える」ことの面白さを実感しました。また、次年度以降も同じ思いを引き継ぎ、より多くの学生に学びの機会を提供していくことの重要性も感じています。この取り組みが今後も受け継がれ、未来の学生たちにとってかけがえのない経験であり続けることを心から願っています。

最後に、本イベントにご支援・ご協力いただいた同窓会の皆様、企業の皆様、大学本部の皆様、理学部の先生方、理学部総務・教務の皆様、そして実行委員、学科代表、ブースメンバーを含むすべての関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



SF2025実行委員

出会いに支えられた4年間

2026年（令和8年）数学科卒業 木南 彩

4年間の大学生生活を振り返ると、本当にたくさんの方々と出会い、支えられ、助けていただきながら、無事に卒業の日を迎えることができたのだと感じます。入学前の私は、富山を訪れたこともなく、知り合いもいない土地での新生活に、不安と期待が入り混じった状態でスタートしました。

そんな大学生活の中で、特に印象に残っているのは「人とのつながり」です。まず一つ目は、数学科での出会いです。数学科の授業は決して簡単なものではなく、一度つまずくと前に進めなくなりそうで、不安になったり、逃げ出したくなったりすることもありました。そんなとき、いつもそばで支えてくれたのが同期の女子学生4人の存在でした。分からないところを一緒に考え、丁寧に教えてくれたことはもちろん、休憩時間や何気ない会話で笑い合う時間が、何度も心を軽くしてくれました。女子が5人という少人数の学年でしたが、そのつながりがあったからこそ、4年間学び続けることができたのだと思います。



数学科女子

また、数学科の先生方も、いつも丁寧に質問に向き合ってくださり、ときには数学以外の話題にも気さくに応じてくださいました。そんな温かいご指導に、心から感謝しています。

さらに、1年生から4年生までサイエンスフェスティバルの活動に参加し、多くの方と関わる貴重な機会をいただきました。共に活動した同期や、親身に接してくださった先輩・後輩、そして支えてくださった先生方。毎年夏の短い期間ではありましたが、みんなで一つのものを作り上げ、来場された方々と交流した経験は、今でも鮮明に心に残っています。

二つ目は、アカペラサークルでの活動です。練習の中で大変なことやつらいこともありましたが、サークルのみんなが温かく接してくれたおかげで、最後まで楽しく活動することができました。また、さまざまな場所で歌う機会を通して、多くの人と出会い、交流できたことも大切な思い出です。

サークルでは、新しく設けられた広報という役職や班長も務め、歌うこと以外にもさまざまな経験をさせてもらいました。その中で、「今よりもっと良いものをつくりたい」という気持ちが芽生え、向上心を持つことができたことは、今の自分の価値観にもつながっていると感じています。共に歌い、語り合い、笑い合った日々は、どれもかけがえのない時間でした。

このほかにも、数えきれないほどの出会いがありました。その一つひとつが、今の私を形づくってくれているのだと思います。これから社会人として新たな一步を踏み出しますが、これまでの出会いを大切にしながら、これからの新しい出会いにも前向きに向き合っていきたいです。そして、大学で出会った皆さんとのご縁も、これから先ずっと大切にしていきたいと思っています。

4年間、本当にありがとうございました。

多くのつながりに支えられた卒業研究

2026年（令和8年）物理学科卒業 加藤 聡

初めに、このような役割を担わせていただいたことに感謝申し上げます。私は理学部物理学科・宇宙素粒子実験研究室に所属しており、研究の進捗を評価され、この文章を書く機会をいただきました。しかし、自分は特別成績が優秀なわけではなく、研究においても自分のことで精一杯でした。改めてこれまでの研究を振り返ると、最後まで続けられたのは、決して自分一人の力だけではなかったと実感します。

もともと私は、理系の研究とは、孤独なものであり、実験や勉強に一人で黙々と取り組むものだと考えていました。また、そのような研究スタイルは自分に向いているとも感じていました。そのため、岐阜県の東京大学神岡宇宙線研究施設に長期間出張し、外部の研究機関の先生にマンツーマンで指導していただきながら研究する道を選びました。研究内容は「 ^{96}Zr におけるニュートリノを放出しない二重ベータ崩壊の探索」に向けた実験でした。この崩壊は、

1つの原子核あたり100,000,000,000,000,000,000,000,000年(10²⁶年)に1回起きると考えられている非常に稀な現象です。もし観測できればノーベル賞確定というロマン溢れる研究テーマでした。今回は原理実証の段階として「二重ベータ崩壊」というこちらも非常に稀な現象の観測実験を実施しました。しかし、いざ研究が始まると待ち受けていたのは、10 kgの鉛をひたすら運び、積み上げる作業でした。崩壊の観測に向けて周囲からのノイズを減らすため、検出器を鉛の壁で囲う必要があったからです。実験エリアのある神岡鉱山内での作業のため、約700個、総重量約7tの鉛を人力で運ぶことになりました。筋肉痛に耐えながら作業する中で、研究には頭脳だけでなく「筋肉」も必要だと痛感しました。

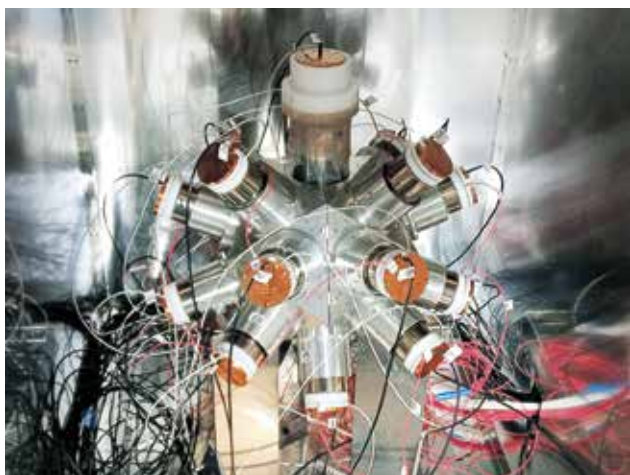
また、予定通りにいかないことの連続でした。愚痴も交えつつ、いくつか災難を紹介します。例えば、一週間で完了する予定の作業でも、度重なるエラーの発生により、最終的に一か月以上かかることもありました。さらに、一か月かけてデータを取得する予定の実験が、様々なトラブルが重なり、一晩で終わらせなければならなくなったこともありました。人手も時間も足りない中、休日も作業を進める日々が続きました。こうした苦い経験から、研究には「忍耐力」が必要だと学びました。

しかし、出張生活の中には楽しみもありました。先輩が

突然「ご飯行こう!」「卓球しよう!」と声をかけてくださることが、励みとなりました。研究では鉛運びを手伝っていただいたり、実験原理を解説していただいたりと、多くの面で支えられました。研究室メンバーや他大学・外部の研究機関の方々との飲み会も欠かせない時間でした。研究の進捗について少しは話すものの、多くの時間は愚痴を言い合いました。自分の苦勞が笑い話になることが何よりの救いでした。時には毒を吐ける環境を設けていただけたことに心から感謝しています。研究は決して一人では成り立たず、「人とのつながり」が不可欠だと実感しました。

こうして約四か月間の出張生活を終え、研究成果を卒業論文にまとめることができました。実験から得られた結果も大事ですが、それ以上に意義深いのは研究を通して得られた筋力や忍耐力、そして人とのつながりでした。多くの方々の力をお借りしてやり遂げた経験は自信となるだけでなく、信頼関係の重要性を気付かせてくれました。得られたつながりとその価値に気付けたことは、自分にとってかけがえのない財産です。これからも大切にしていきたいと思います。

最後に、これまでお世話になった研究施設のスタッフの皆様、研究室のメンバー、先輩方、先生方、そして陰ながら支えてくださった家族に、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



崩壊の観測に向けた検出器



検出器を囲う鉛遮蔽体（左が先輩、右が自分）

写真フォルダに残る4年間

富山大学で過ごした4年を振り返ろうと、スマートフォンの写真フォルダを眺めていると、植物や動物などの写真が多く残っていることに気づきました。通学路や大学敷地内に咲いていたチューリップや水仙、桜の写真。花屋でアルバイトをしていた際に作成した花束や観葉植物の写真。大学で出会った友人と訪れた、富山県内のひまわり畑やコスモス畑の写真。実習で訪れた呉羽山や立山、魚津水族館で撮影した写真もあります。さらに大学敷地内の川に

浮かぶ鴨や壁に張り付いていたカエルの写真まで残っていました。これらの写真はどれも大学生活で私がときめき、感動し、興味を抱いた瞬間を切り取ったものです。富山大学でなければ会うことも、写真に収めることもなかったものが多いように思います。私は長野県の山に囲まれた自然豊かな地域で育ち、多くの生物に触れてきました。そして進学を機に地元を離れ、富山県での生活が始まりました。そんな富山県で過ごした4年間は、気づけばあっという間

でしたが、その中で地元とはまた違った形で多くのものに触れることができたと感じています。

私が撮影した写真の中から、思い出に残っている2枚についてこの機会に振り返ろうと思います。生物学科の授業には、教室を離れ、自然の中で直接体験や観察を行うフィールドワーク実習があります。高山植物について学ぶ実習では、初めて立山に登り、高山帯に生育する草花の生態を学びました。その立山での実習では、貴重な体験をすることができました。絶滅危惧種であり特別天然記念物にも指定されている雷鳥を、偶然にも近くで2度見ることができたのです。1度目は親子で歩いている姿を、2度目は砂浴びをしている様子を目撃しました（写真1）。動物園でも見ることはできますが、本来の生息地である高山帯で実際に観察できたことは非常に貴重であり、強く印象に残っています。

富山大学の敷地内にはさまざまな植物が植えられており、四季折々の姿を見せてくれます。その中でも、私が一番好きなのは秋のイチョウです。五福キャンパスの西門をくぐった通りには両側にイチョウの木が並び、秋が近づくにつれて緑色から黄色へと移り変わる様子を日々感じるこ

とができます。澄んだ秋空に映えるイチョウ並木と、足元に広がる黄色の絨毯を通して授業へ向かうのですが、それらは同時に異臭を放つ爆弾を落とすので、足元に注意しなければなりません。富大生の間でも賛否が分かれる存在ですが、そうしたところも含めて、大学生活の思い出の一つとして印象に残っており、毎年写真に収めていました。富山県には紅葉スポットとして有名な場所が数多くありますが、富山大学のイチョウもそれに劣らない美しさを持っていると感じています。これからもその場所にあり続け、季節が巡るたびに変わらず輝き続けてほしいと願っています（写真2）。

4年間の大学生活を経て富山大学を卒業し、私は現在、公務員として植物や昆虫に関わる仕事に携わっています。大学で学んだ知識や経験を少しでも仕事に活かしたという思いから、この道を選びました。今後は、日々の学びを大切にしながらさらに経験を積み重ね、励みたいと考えています。富山大学での4年間で出会った方々や経験は私にとってかけがえのないものとなりました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



写真1. 砂浴び中の雷鳥



写真2. 富山大学のイチョウ並木

気づけば4年

気づけば4年が過ぎておりました。特に研究室に配属された3年生後期から4年生にかけてはあっという間で、気づけば大学院入試が終わり、夏休みが終わり、新しく3年生が研究室に加入し、学会発表も終わり、年が変わり、卒業論文発表会が終わり……。私には大学1年時から共に遊び、ほぼ同じ授業を履修した友人がいるのですが、4年間も一緒にいて、高校からの同級生よりも長い時間を過ごしたのかと思うと不思議な気持ちになります。その友人と

2026年（令和8年）自然環境科学科卒業 遠藤 颯太

話していると1年生のときに毎週通っていたカラオケの話題が挙ります。私自身、丸亀製麺すらない岐阜の田舎出身なのでカラオケに通い続けるというのは今までにない経験でした。大学近くの今は亡き「カラオケゴリラ」からはじまり、安さを求め「カラオケまねきねこ」に導かれ、ソフトクリームに誘惑されこれも現在は「カラオケまねきねこ」に変わりましたが「コートダジュール」に移り、最終的には「ジャンカラ」に落ち着きました。時間帯も大きく変わ

り、カラオケに通い始めた当初は夜に出歩くのが嫌で授業終わり昼から18時くらいまででしたが、いつのまにか夜から次の日の朝までが当たり前になりました。カラオケに行った当初、自分がなにを歌っていたのかなどは覚えてもありませんが、歌える曲は増えたのかなと思います。

2年生になるとカラオケの熱も冷め、毎週通うようなことはなくなり、専門性の高くなった授業とレポートに追われておりました。ただ、大きな出来事としては私の学科のある先生との出会いでしょうか。授業の分からないところを聞くために訪ねたのをはじまりに、その後友人と共に定期的に訪ね、ついには研究と山スキーを目的に北海道に行くことになりました。皆様、雪の結晶を顕微鏡でご覧になったことはありますか。レンズ越しの結晶は驚くほど繊細で、

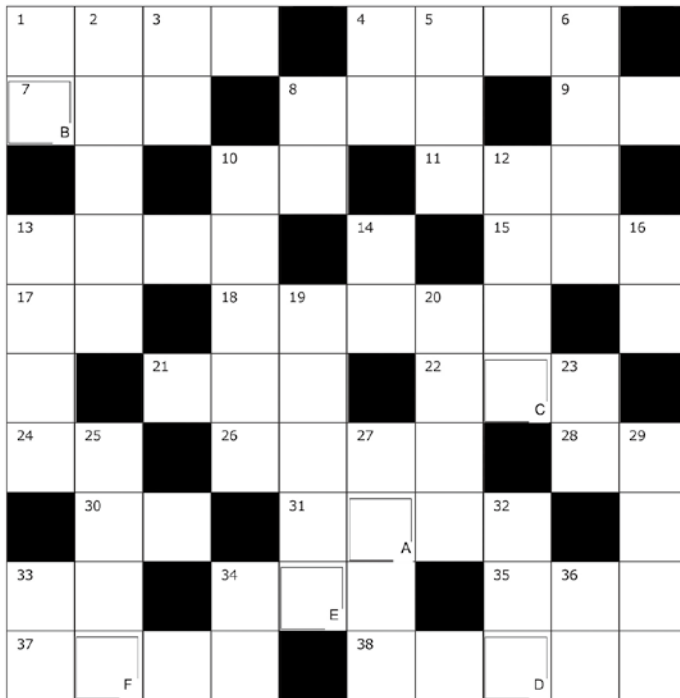
まさに寒空に隠された秘宝。また、多くの結晶は地上で待つ私たちのもとに辿り着くまでに枝が折れたりしているのですが、完全な形のまま観察できることもあります。その姿を見ると「よくぞここまで無事に届いてくれた」と胸がいっぱいになります。

あっという間の4年間でしたが、様々な経験をすることができました。特に最後の4年時においては研究活動・学会発表・卒業研究発表を通して大きく成長できた1年でした。全ての経験が社会に出たときに活かされるとは限りませんがひとつひとつ大切にしたいと思います。最後に大学生活で関わってくださった友人、先輩方、先生方に心より感謝いたします。本当にありがとうございました。

『サイエンス・フェスティバル 2025 の一コマ』



懸賞付きクロスワード・パズル



<タテのカギ>

1. 潔白の象徴。
2. バルカン半島北東部にある国。
3. ウェブ上で一気に流行。
4. 青よりも濃い青。
5. 将軍の居所。
6. 11月の誕生石。
8. お菓。
10. 植物の属名。エンレイソウという知名で知られる。
12. 限界。
13. ミカン科の果樹。ジュースと言えば・・・。
14. 地球の衛星。ウサギがいるとかいないとか。
16. 卵の中心部分。
19. 緑色が美しい宝石。
20. 危険を伴う。
23. しみやエグみ。
25. フランスの物理学者が力学的仕事の概念を確立。
●●●●の力。
27. 土や岩石を掘って鉱物をとること。
29. モルタルやコンクリートの材料
32. 小さな石ころ。
33. 夕焼けや血液の色。
34. 皇室の紋章。
36. 通勤・通学にも利用される大型の車。

<ヨコのカギ>

1. ミラノ・コルティナオリンピックで日本は7つ獲得したメダルの色は。
4. 青色を連想する金属元素。
7. 薔薇。香りが高く、赤・白・ピンク等の華麗な花が咲く。
8. 赤と白を混ぜるとできる色。
9. 小麦が主材料の食品。朝食に食べる人も多い。
10. "take"の日本語の意味。
11. 自由。
13. 三角が一般的。ピクニックや運動会のお供に。
15. 山野に自生する落葉高木。多数の小白色花が咲く。
17. 珍しいもの。希少品。
18. 売上に対して利益が多い。●●●●●の高いビジネス。
21. 果実は小形球状、梅干しの材料に。
22. お店を英語で。
24. 自分自身。
26. 赤と青の間色。
28. ない人でも7つはあると言われている。
30. 地表の水に覆われていない部分。地球の約3割。
31. 人気ゲームキャラクターの弟。
33. 空と海の美しい色。
34. 送ったメッセージが読まれる。
35. 乱暴で人道に反すること。
37. 中華料理は●●●●が命。
38. 旅人。

<クイズの回答>



(クイズ提供：中村幸絵 56 化)

<応募方法>

下の二次元コードよりご応募ください。
奮ってのご応募お待ちしております。

<応募締切>

2027年1月15日



<懸賞品>

クイズに正解された方の中から抽選で1名様に、能作 (NOUSAKU) のタンブラーをプレゼントいたします！
ふるってご応募ください。

※賞品の内容は予告なく変更となる場合がございます。あらかじめご了承ください。



(写真 能作の Web ページより)

< 2025 年 懸賞付きクロスワード・パズル 当選者発表 >

昨年は、多数の同窓生の皆様よりご応募をいただき、誠にありがとうございました。厳正なる抽選の結果、山谷恭代様 (2016 年 生物学科卒業) がご当選されました。おめでとうございます。

山谷様からは、

「毎年、理学部同窓会報を拝読するたびに、お世話になった先生方のお名前や寄稿記事に触れ、懐かしい気持ちでいっぱいになります。今後とも同窓会報を通じて、理学部の先生方や学生の皆様のご活躍を拝見できることを楽しみにしております。」との温かいメッセージを頂戴しております。心より御礼申し上げます。

本年もぜひご応募ください。皆様のご参加をお待ちしております。

なお本年は、応募に際しまして、皆様からの近況等のご提供も併せてお願いしております。同窓会のさらなる活性化のため、ぜひご協力賜りますようお願い申し上げます。

2025 年 (令和 7 年) 度寄付報告

同窓会活動へのご寄付におきまして、多くの皆様からご支援を賜りましたことをここに御礼申し上げます。

ご寄付を頂いた皆様のご芳名を掲載して謝辞を表し、ご報告させていただきます。 (順不同・敬称略)

[数学科] 村上 透 [物理学科] 森山 健三、裏 則岳、谷口 泰弘、干場 一史、野田 良彦、吉河 満男、
早川 明治 [化学科] 釣賀 紀子、富川 幸子、小西 哲朗、北野 芳則、橋本 雅子、岩城 圭一、佐野 明美
[生物学科] 川本 泰郎、黒金 智文、小泉 隆、松井 純、石田 一真、直田 美千子 [地球科学科] 今森 達也
他、匿名 18 名 2025(令和 7)年度 寄付件数 40 件 寄付総額 655,110 円

雪紋への寄付のお願い

送金先：ゆうちょ銀行 口座番号：00700-0-16829 口座名称：富山大学理学部同窓会 雪紋

同窓会活動を円滑に行うために、会員からの寄付を募ります。

一口 5,000 円で、何口でも、ご協力をお願い申し上げます。

※ 通信欄には「おところ」「おなまえ」の他に、「ご卒業学科」「ご卒業年」と、同窓会報等の発行物に氏名の掲載を希望されない方は「匿名希望」とお書き添え下さい。

※ 同窓会会員から寄付されたご芳志は、理学部サイエンスフェスティバルへの支援、理学部の教育・研究支援、理学部学位記授与式・祝賀会支援、記念品贈呈、同窓会広報 雪紋 発行費への補助に使用します。

事務局通信

[1] 会員情報

(1) 物故者 氏名、卒業回・年、学科、逝去日 2026年3月までに連絡のあった物故会員

天野（江上）眞智子、25回・1977(S52)、物理、2024年10月26日死去
石倉（奥田）恵子、25回・1977(S52)、化学、
金盛（高田）文子、21回・1973(S48)、化学、
米納 市夫、10回・1962(S37)、化学、2024年8月14日死去
清水 明幸、7回・1959(S34)、数学、2024年12月8日死去
壺井 愛子、52回・2004(H16)、生物、2025年1月13日死去
中出 宣次、13回・1965(S40)、数学、2024年12月17日死去
中野（山本）康之、16回・1968(S43)、数学、
野村 彌作、21回・1973(S48)、数学、
平林 儀雄、11回・1963(S38)、物理、2024年8月死去
藤田 さおり、43回・1995(H7)、生物、
南山（舟坂）隆博、5回・1957(S32)、生物、2025年4月死去
山口 浩、35回・1987(S62)、数学、2024年7月死去
米山 嘉治、29回・1987(S62)、化学、

(2) 教職員の異動（令和8年5月12日現在）

[採用]

R7. 5. 1 KALYANA SUNDARAM SHALINI DEVI 学術研究部理学系 自然環境科学プログラム 特命助教
R7. 6. 1 小湊 望 研究推進機構 水素同位体科学研究センター 助教
R8. 4. 1 五十川 浩希 研究推進機構 水素同位体科学研究センター 助教
R8. 5. 1 NARADASU DIVYA 学術研究部理学系 自然環境科学プログラム 特命助教

[昇任]

R8. 4. 1 鹿兒島 涉悟 学術研究部理学系 自然環境科学プログラム 講師

[退職]

R8. 2. 28 YANG HEEJUN 学術研究部理学系 自然環境科学プログラム 特命准教授
R8. 3. 31 宇田 智紀 学術研究部理学系 数理情報学プログラム 特命講師
R8. 3. 31 藤原 素子 学術研究部理学系 物理学プログラム 助教

[定年]

R8. 3. 31 永井 節夫 学術研究部理学系 数学プログラム 教授
R8. 3. 31 野崎 浩一 学術研究部理学系 化学プログラム 教授
R8. 3. 31 宮澤 眞宏 学術研究部理学系 化学プログラム 准教授
R8. 3. 31 若杉 達也 学術研究部理学系 生物科学プログラム 教授
R8. 3. 31 横畑 泰志 学術研究部理学系 自然環境科学プログラム 教授

[2] 活動報告

(1) 2025 (R7) 年度 理事会

日時：2025年5月8日（木）18：30～

場所：富山大学理学部1階 B136 大会議室

議事：1) 令和6年度業務・活動報告

2) 令和6年度決算報告および監査報告

3) 令和7年度役員（案）

4) 令和7年度事業・活動計画（案）

5) 令和7年度会計予算（案）

6) 同窓会名の略称に関する会則の修正（案）

7) 報告事項・その他

(2) 令和7年度研究助成事業

募集期間：2025年4月1日～2025年5月31日

6件を採択

(3) 第16回富山大学同窓会連合会総会・記念講演会

日時：2025年7月19日（土）10：00～

場所：富山電気ビル

記念講演会：演題「すこやかに生きる、整形外科医が
教える腰痛と関節痛の対処法」

講師 川口 善治 氏

（富山大学医学部整形外科 教授）

(4) 富山大学理学部同窓会 雪紋 年次総会・記念講演会

日時：2025 年 7 月 26 日（土）12：30～

場所：富山県民会館 7 階 701 号室

1. 記念講演会

富山県環境科学センター・第 66 次南極地域観測隊
木戸 瑞佳 氏（地球 41 回生）

「南極観測体験談」

2. 年次総会

1) 令和 6 年度事業報告、会計決算報告、監査報告

2) 令和 7 年度事業計画、会計予算案他

3. 懇親会

(5) 第 15 回雪紋会ホームカミングデー

日時：2025 年 9 月 20 日（土）13：20～16：30

場所：富山大学理学部

内容：サイエンスフェスティバルへの参加

(6) 富山大学統合 20 周年記念式典・記念シンポジウム

日時：2025 年 10 月 1 日（水）13：00～

場所：富山大学五福キャンパス黒田講堂ホール

内容：記念式典、記念シンポジウム

（記念パネルディスカッション）

(7) 第 18 回富山大学ホームカミングデー

日時：2025 年 10 月 25 日（土）10：00～

場所：富山大学五福キャンパス 教育学部 B 1

（教育学部第 1 棟）141 講義室

内容：学長 齋藤 滋 氏 挨拶、シンポジウム他

(8) 理系キャリアデザイン講座支援

期間：2025 年 11 月 5 日（水）～2026 年 1 月 28 日（水）

理学部卒業生による講演

(9) サイエンスフェスティバル支援懇談会

日時：2025 年 6 月 7 日（土）、2026 年 1 月 31 日（土）

SF 実行委員との懇談

(10) 富山大学理学部学位記授与式支援

日時：2026 年 3 月 24 日（火） 記念品贈呈

『富山大学理学部同窓会 雪紋 年次総会・記念講演会・懇親会の一コマ』



[3] 理学部キャリア・デザイン講座 2025 支援

第1回 11月5日

講師：馬場 円香

所属：富士フイルムマニュファクチャリング株式会社
人事総務部本社人事グループ

演題：「採用人事が教える就職活動とキャリアについて」



講師：蛭田 健司

所属：株式会社 AKALI 代表取締役

演題：「発展を続けるゲーム業界の展望とキャリアの築き方」



第2回 11月12日

講師：柳生 慶

所属：東京理科大学 理学部第二部物理学科 准教授

演題：「アカデミアの魅力 ～博士号を取得する意義とは～」



講師：沖野 寿幸

所属：株式会社 トンボ飲料 工場長

演題：「会社を選ぶのか？仕事を選ぶのか？」



第3回 11月19日

講師：宮本 憲優

所属：エーザイ株式会社

高度バイオシグナル安全性評価部 主幹研究員

演題：「human health care 理念に基づく創薬研究」



講師：市村 美紗稀

所属：横浜植物防疫所 成田支所第2PTB 旅客担当係員

演題：「植物防疫所とは？」



(市村様には、今号の「キャンパスを振り返って」にもご寄稿いただいております。)

第4回 12月3日

講師：山下 淳

所属：矢崎総業株式会社

演題：「理学部出身の強み」



講師：望月 駿

所属：キヤノン株式会社

演題：「ロールモデルからはじめるキャリアデザイン」



第5回 12月17日

講師：金岡 一孝

所属：小矢部市立石動中学校

演題：「教師という仕事」



講師：布野 隆裕

所属：協和ファーマケミカル株式会社 SCM 統括部
原料・製品担当

演題：「原薬メーカーでのお仕事と私のキャリア
(視野を広げてみませんか?)」



第7回 1月14日

講師：南 遼太郎

所属：三耐保温株式会社 営業部施工管理第2チーム

演題：「就職して思う「今、何をすべきか」



講師：神田 柚紀

所属：株式会社インテック ビジネスイノベーション部
主事

演題：「未経験から IT 企業で働くことについて」



第6回 1月7日

講師：脇本 孝俊

所属：金森産業株式会社 富山ヘルスケア原材料グループ

演題：「大学院・環境計量証明事業所・化学専門商社での
経験を通して」



講師：藤川 武命

所属：学校法人荒井学園 高岡向陵高等学校

演題：「理学部での学びと高等学校における探究学習」



第8回 1月28日

講師：川本 朋慶

所属：一般財団法人自然環境研究センター 第一研究部
主任研究員

演題：「ちょっと面白い人と生き物の関係の仕事
～フィールドワークからラボそしてデスクまで～」



講師：沼田 守

所属：株式会社ムロオシステムズ アドバイザー

演題：「一化学徒のキャリア展開～ビジネス世界への挑戦
～」

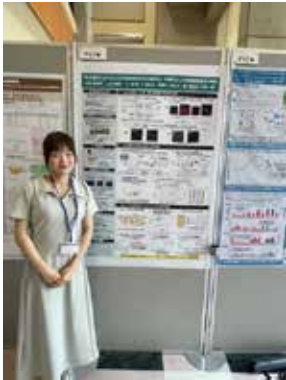


(写真提供 熊田 重勝)

富山大学理学部同窓会 2024 年度（令和 6 年度）研究助成報告書

所属研究科・学環	理工学研究科理工学専攻
所属プログラム	数理情報学プログラム
氏 名	鈴木 紗佳
研 究 題 目	標準形非協力ゲームの均衡選択問題に対する空間支配アプローチ
【研究助成報告】	
ナッシュ均衡の概念は、ゲーム理論における解概念として中心的な役割を果たしてきた。しかし、複数のナッシュ均衡が存在するゲームにおいては、どの均衡を選択すべきかという均衡選択の問題が生じる。この問題を扱うために、Hofbauer は、2 つの強ナッシュ均衡を持つ対称 2×2 ゲームに対し、最適反応動学に基づく 2 成分の反応拡散モデルを提案した。彼は、モデルの簡略化のため、拡散係数が戦略に依存せずすべて等しいと仮定し、2 つのナッシュ均衡を結ぶ進行波解の一意存在と単調性を示した。さらに、その波の伝播方向が利得（比）によって決定されることを明らかにし、これを均衡選択の指標として用いた。 本研究の目的は、Hofbauer による均衡選択の基準を拡張することではなく、Hofbauer の 2 成分反応拡散モデルにおいて、拡散係数が等しいという仮定を緩めたときに進行波解の性質がどのように変化するかを明らかにすることである。拡散係数が戦略に依存し異なる場合、モデルに内在していた対称性が失われるため、進行波解の存在や一意性、さらにはその伝播方向の解析は、等拡散の場合に比べて本質的に難しくなる。このような設定は、より一般的で現実的な状況を反映している一方、理論的な解析には工夫を要する。 本研究では、このような状況の下で、進行波解の存在・非存在、一意性・多重性、ならびに波速の符号が、利得（比）だけでなく拡散係数（比）にも依存することを示した。また、進行波解の単調性や非単調な挙動の可能性を含む、その形状に関する結果も得た。 これらの結果は、拡散係数が等しい場合に対する Hofbauer の解析を補完するものであり、拡散係数が異なる場合を許したときに、進行波解のどの性質が維持され、どの性質が変化するかを体系的に示している点に意義がある。本研究の成果は現在、学術誌「Monatshefte für Mathematik」に投稿中である。 今後の課題としては、本研究で得られた進行波解の安定性の解析が挙げられる。特に、複数の進行波解が存在する場合に、それらのうちどの解が安定的となるのかという問題に強い関心がある。また、ゲーム理論的な背景からは一旦離れるが、同一均衡（平衡点）を結ぶ進行波解の存在や性質についても、より一般的な観点から研究していきたいと考えている。 本研究は、理学部同窓会からの研究助成を受けて実施された。本助成金は、研究活動を円滑に進めるための研究環境の整備、および本研究に関連する知見を深める目的で、2025 年 3 月 7 日・8 日に金沢商工会議所にて開催されたゲーム理論ワークショップへの参加費用として活用した。ワークショップへの参加を通じて、関連分野の研究動向を把握するとともに、研究内容について多くの有益な意見を得ることができた。本助成制度による支援は、本研究の遂行において有意義であり、ここに記して謝意を表する。	
	
修士論文発表会における発表の様子	
【論文発表・学会発表・その他実績】	
・ 2026 年 出口英生, 池田榮雄, <u>鈴木紗佳</u>, “Existence of traveling wave solutions appearing in game theory”, Monatshefte für Mathematik, (投稿中)	

富山大学理学部同窓会 2024 年度（令和 6 年度）研究助成報告書

所属研究科・学環	理工学研究科
所属プログラム	地球生命環境科学プログラム
氏 名	萩 明日花
研 究 題 目 ※申請時と同じ題目としてください。	コクゾウムシをモデルとした、内部共生系の機能を阻害する新規防除資材の開発
【研究助成報告】	
虫害防除には殺虫剤が有効であるが、特異性の低さによる環境負荷が課題となっている。持続可能な農業の実現には、標的特異性の高い防除資材の開発が求められる。多くの害虫は菌細胞内に必須共生細菌を保持し、その増殖や局在は抗菌ペプチドにより制御されていることから、これらは有望な防除標的と考えられる。私は、内部共生系をもつコクゾウムシ類をモデル生物として、抗菌ペプチドによる共生細菌制御機構の解明に取り組んだ。共生細菌 <i>Sodalis</i> の増殖は、菌細胞内で高発現する抗菌ペプチド Coleopteracin 1 (Col1) により制御されることが知られている。そこで、過去に選抜された Col1 候補阻害剤の生物活性評価および Col1 の機能解析を行った。しかし、阻害候補化合物の投与では生存率や体色に有意な影響は認められなかった。一方、幼虫期に Col1 をノックダウンすると、蛹初期には共生細菌 <i>Sodalis</i> の菌細胞外への逸脱が観察されたが、蛹後期には再局在が確認され、補償機構の存在が示唆された。さらに私は、内部共生系への関与が示唆されている <i>Dpt-like</i> 遺伝子にも着目し、その機能解析を行なった。Dpt-like タンパク質を精製し抗菌活性を検証することで、大腸菌に対し細胞分裂阻害を介した増殖抑制活性を示すことを明らかにした。一方、<i>Dpt-like</i> をノックダウンした個体では、共生細菌量の一時的な増加は認められたものの、宿主個体の生存率や体色に顕著な影響はなかった。以上の結果から、内部共生系は単一因子ではなく複数の抗菌ペプチドや免疫関連因子による冗長的な制御機構によって維持されている可能性が示された。 本助成では、これらの成果を日本進化学会第 27 回大会で発表するための旅費をご支援いただいた。私はポスター発表を行い、Dpt-like の機能について多くの研究者と活発な議論を行なった。特に、「ノックダウンの結果のみで菌細胞内で抗菌ペプチドとして機能していると結論づけられるのか」「実際に抗菌活性を直接検証すべきではないか」とのご指摘をいただいたことが、本研究の大きな転機となった。この助言を受けて研究計画を再検討し、Dpt-like の抗菌活性を実証する実験を追加した。その結果、実際に抗菌作用を有することを確認し、菌細胞内で機能している可能性を示唆する重要な知見を得るに至った。さらに、多くの研究者から、「単一の抗菌ペプチドのみが共生細菌維持を担っているのではなく、他の抗菌ペプチドや免疫関連因子が協調的に機能しているのではないか」とのご意見をいただいた。これは、その後の解析結果とも一致しており、内部共生系が冗長的な制御機構によって維持されているという仮説への理解を一層深める契機となった。 今回得られた成果は、内部共生系制御機構の理解を一步前進させるものであり、学術的にも意義あるものである。本助成により、研究成果を広く発信するとともに、多角的な視点からの助言を得て研究を発展させることができた。ここに深く御礼申し上げます。	
 	
研究室での実験風景 日本進化学会第 27 回大会でのポスター発表	
【論文発表・学会発表・その他実績】	
発表年順（新しいものから）記入すること。ただし、本研究助成採択後のものに限る。	
【学会発表】	
萩 明日花, 土方 優和, 土田 努. 「共生進化により生じた生物間相互作用の集約点」を標的とした新規害虫防除資材の開発, 日本進化学会 第 27 回大会 (2025 年 8 月 20-22 日, 長浜市)	

富山大学理学部同窓会 2024 年度（令和 6 年度）研究助成報告書

所属研究科・学環	理工学研究科
所属プログラム	地球生命環境科学プログラム
氏 名	桑原 想
研 究 題 目 ※申請時と同じ題目としてください。	ゼブラフィッシュの卵胞発達過程における PACAP および PAC1 受容体の機能の解明
【研究助成報告】	
卵胞とは卵母細胞の発達を支持するための構造体のことである。卵巣内では卵胞発達が進行し、十分に発達した卵胞から卵母細胞が排卵されており、この一連の仕組みは哺乳類と真骨魚類で共通している。卵胞の発達は主に中枢性のゴナドトロピンによって制御されることが知られている。一方で哺乳類の原始卵胞や真骨魚類の一次成長期（primary growth: PG）卵胞といった発達初期段階の卵胞は、ゴナドトロピンに依存せず発達可能であり、その制御には卵巣内局所因子が関与すると考えられている（Huhtaniemi and Themmen, 2005; Lubzens et al., 2010）。原始卵胞の発達異常は生殖機能の早期衰退や不妊に繋がることから、その制御機構の解明が求められている。しかし、哺乳類における卵胞発達の解析は技術的制約が大きく、未解明な点が多く残されている。そこで本研究では、卵胞発達の研究において優れたモデル生物である真骨魚類のゼブラフィッシュ（<i>Danio rerio</i>）に着目した。所属研究室の先行研究により、様々な中枢作用および末梢作用にはたらく生理活性ペプチドである下垂体アデニル酸シクラーゼ活性化ポリペプチド 1（PACAP1）が、PG 卵胞に局在することが明らかにされている（前田、2021 年度修士論文；桑原、2023 年度卒業論文）。そこで本研究では、PACAP1 が PG 卵胞の発達を制御する卵巣内局所因子であるという仮説を立て、卵胞発達過程における PACAP1 の機能解明を目的とした。 まず、PACAP1 を欠損させた PACAP1 KO ゼブラフィッシュの表現型を解析した。その結果、雌における PACAP1 の欠損により、産卵可能回数の減少および卵巣の縮小が認められた。さらに、産卵した卵を評価した結果、未受精卵率および異常発生胚率の上昇、ならびに孵化率の低下が明らかとなった。次に、卵胞発達に異常が生じている可能性を検証するため、卵胞発達を組織学的および分子生物学的に評価した。その結果、PACAP1 の欠損により PG 卵胞の蓄積と、ゴナドトロピンに応答して発達する卵胞の減少が認められ、PG 卵胞から次段階への発達移行が阻害されていることが明らかとなった。先行研究において、Activin の適切な発現誘導が PG 卵胞の発達に必要であることが示唆されている（Zhao et al., 2022）。そこで卵巣における Activin 発現量を解析した結果、PACAP1 の欠損により Activin の発現が減少していることが明らかとなった。さらに、PACAP1 が卵巣内局所因子として直接 PG 卵胞の発達に関与するかを検証するため、PG 卵胞の組織培養系を確立し、PACAP1 の添加実験を行った。その結果、PACAP1 の添加により PG 卵胞の肥大化が誘導され、Activin の発現増加が認められた。 本研究により、PACAP の欠損が卵胞発達に及ぼす影響を脊椎動物種で初めて明らかにした。さらに、PACAP1 が PG 卵胞から分泌され、オートクラインあるいはパラクライン経路により PG 卵胞に作用し、Activin の発現を誘導することで PG 卵胞の発達を促進するという、新たな調節機構（PACAP-Activin シグナル）の存在が示唆された。以上の結果から、PACAP1 はゴナドトロピン非依存的な卵胞初期発達において、卵巣内局所因子として機能することが示された。PACAP および Activin の一次構造は進化的保存性が高いことが報告されている（Tada et al., 1998; Vaudry et al., 2009）。このことから、PACAP-Activin シグナルは脊椎動物種間で共通する発達初期卵胞の制御機構である可能性が考えられる。 ヒトにおいては、卵胞発達不全により排卵可能な卵胞が枯渇することで、卵巣の委縮や月経異常、早期閉経を呈する早発卵巣不全（POF）が問題となっている（Kawamura et al., 2016）。本研究の結果は、ゼブラフィッシュがこの疾患のモデルとして有用である可能性を示すものであり、発達初期卵胞における PACAP-Activin シグナルの解明が、POF の病理理解および新規治療法開発の糸口となることが期待される。 本助成を受けて得られた研究成果は、本助成金を使用して参加した国際学会にて発表いたしました。深く感謝申し上げます。	

【論文発表・学会発表・その他実績】

発表年順（新しいものから）記入すること。ただし、本研究助成採択後のものに限る。

学会発表

・ Sou Kuwabara, Ryunosuke Maeda, Norifumi Konno, Kouhei Matsuda, Tomoya Nakamachi (2025. 7. 8-12)
THE EFFECT OF PACAP1 KNOCKOUT AND LOCALIZATION OF PACAP IN THE ZEBRAFISH OVARY
19th International Congress of Comparative Endocrinology (ICCE19), Sendai, JAPAN

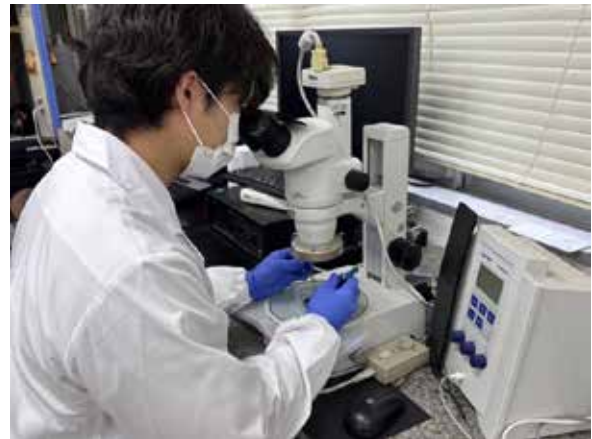
・ 桑原想, 前田龍之介, 今野紀文, 松田恒平, 中町智哉 (2024. 12. 7-8)
ゼブラフィッシュの卵巣における PACAP KO による影響の評価および PACAP の発現局在解析
2024 年度日本動物学会中部支部 福井大会

実績

・ 2024 年度日本動物学会中部支部 福井大会にて「優秀口頭発表賞」を受賞



遺伝子発現解析の実験風景



組織片をサンプリングしている風景



左より、桑原 想さん、山澤 泰さん、萩 明日花さん
2025 年度 年次総会にて

富山大学理学部同窓会 2024 年度（令和 6 年度）研究助成報告書

所属研究科・学環	理工学研究科
所属プログラム	地球生命環境科学プログラム
学 籍 番 号	
E-mail	
氏 名	山澤 泰
研 究 題 目 ※申請時と同じ題目としてください。	モグラ科動物のトンネルを利用する動物種およびその利用状況の 解明に向けた接触型センサーを用いた自動撮影装置の開発

【研究助成報告】

- ・本助成を受けての研究活動・研究内容と助成を受けての感想などを 1,200 字程度にまとめてください。
- ・図表・写真などの貼付は 1 枚までとし、キャプションを付けてください。

【概要】

モグラのトンネルは、モグラ以外の他の小動物にも利用されるが、その実態はよく分かっていない。トンネル（＝地下空間）の他種への提供という観点から、モグラが生態系で果たす役割を解明するにあたり、申請時に以下の 3 つの課題を提示していた。

- ①利用する動物相の解明（どのような動物種がトンネルを利用しているか？）
- ②トンネル利用の意義の解明（トンネルは利用種にどのような利点をもたらすか？）
- ③生物間相互作用の解明（モグラと利用種は互いの利用にどのように影響し合っているか？）

これらを解決するために申請者は、カメラトラップ（自動撮影法）を応用し、モグラのトンネルを利用する動物の検知方法を模索してきた。カメラトラップは、利用種だけでなく利用状況の詳細（時間帯や頻度）を明らかにすることができる。申請者は一般的な赤外線トレイルカメラを用いて、利用種の撮影に成功している。しかし、モグラは自身のトンネル内の異物や改変に過敏な忌避反応を示し、土でカメラを埋没させるなどして撮影を妨げる。モグラを撮影し、他種との利用状況を比較できれば、課題③の解決への手がかりとなる。そこで本研究では、モグラに忌避されない自動撮影装置の開発を目的とし、モグラへの刺激を最小限にした接触型センサー式の撮影装置の作製に取り組んだ。

【活動内容】

従来（申請者自身がはじめに開発した方法）は一般的なセンサーカメラ（15 cm×10 cm×6 cmほどの直方体）を、トンネルの一部を崩して設けた空間に設置する仕様だった。この方法はモグラへの刺激が強いため、トンネルを崩さずに地上部からカメラを挿入する仕様を考えた。まず、トンネルに挿入できるようなプローブ状（胃カメラ式の長さ 30 cm、直径 8 mmほどの形状）のファイバースコープカメラ（AMTORIN）と接触センサー（オムロン）を選定した。次に、専門事業者（Ai-Craft）にプログラミングの強力を依頼し、連携をとりながら自動撮影システムの構築に取り組んだ。完成後に野外で試行したところ、設置中にセンサーを待機させる時間は想定よりも電力を消費することが分かったため、5V 出力のポータブル電源を内装することで補填した。これらをハードケースにまとめ、野外での粉塵や降水等に耐えられる設計とした（図 1）。

【結果】

複数の利用動物の撮影に成功した。一方で、モグラによる忌避を完全に防ぐことはできないこと、接触型センサーの故障が起きること、充電が最大でも 3 日間ほどで切れてしまうことなど、課題は山積している。また、接触型センサーを用いずに 24 時間体制で撮影する試験も繰り返し、ファイバースコープカメラの挿入自体が利用種に及ぼす影響も調べた。ネズミ類などは気にする様子を見せるが、1 日に複数回撮影するなど、大きな影響を及ぼさずに撮影はできていた。モグラ類も進行方向とは逆向きの撮影時は気にしないが、進行方向に挿入したカメラがある場合は忌避行動を示し、土壌でカメラを埋没することが多かった。

【成果】

今回の製作品では理想的な撮影には至らなかった。しかし、これまで取り組まれてこなかった、野外におけるトンネル利用種の撮影に挑めた点は、今後の進展への大きな第一歩となった。野生動物の調査手法の開発は、動物相手であるため多くの労力と時間を要する。目に見える地上部だけでなく地下部の生物多様性の重要性に目を向けられている今、どのようにして多様な種が共存しているかを把握するための手法開発は有意義なものであると考えられる。本助成を頂き実施できた試行実験を踏まえ、修士2年時から別の自動撮影システム（画像による動体検知）を用いた試行に取り組んでいる。



図1. 作製したモグラの撮影装置と設置時の様子。

財団や国の支援では取り組みにくいような「試行的な」研究をご支援いただきましたこと、心より感謝申し上げます。また、本研究テーマと関連した内容で学会発表（神戸）の旅費にも計上させていただきました。

【論文発表・学会発表・その他実績】

発表年順（新しいものから）記入すること。ただし、本研究助成採択後のものに限る。

【論文発表】*は責任著者

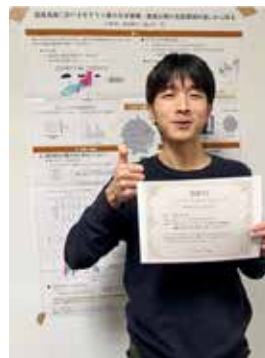
1. **山澤 泰***・横畑泰志 (2025) カメラトラップを用いた、アズマモグラ (*Mogera imaizumii*) のトンネルを利用するヒミズ (*Urotrichus talpoides*) の記録. 哺乳類科学 65. (査読あり)
2. **Yamasawa, T.*** and Tomimatsu, H. (2025) Quantifying the relative abundance of the lesser Japanese mole (*Mogera imaizumii*) in mountain forests: a comparison between natural broad-leaved forests and conifer plantations. *Ecological Research*, 40. (査読あり)

【学会発表】

3. **山澤 泰**・横畑泰志. 隠岐島後におけるモグラ2種の共存機構：景観と微小環境の違いから探る. 日本生態学会中部地区会 2025 年度大会, 名古屋. 2025 年 12 月. (ポスター)：優秀発表賞受賞
4. **山澤 泰**・横畑泰志. 隠岐島後におけるアズマモグラ隔離個体群の実態. 日本哺乳類学会 2025 年度大会, 江別. 2025 年 8 月. (ポスター)
5. **山澤 泰**・横畑泰志. アズマモグラのトンネルを利用する動物相の把握：カメラトラップとピットフォールトラップの活用. 日本生態学会中部地区会 2024 年度大会, 三重. 2024 年 12 月. (ポスター)
6. **山澤 泰**・横畑泰志. カメラトラップによる、アズマモグラのトンネルを利用するヒミズの記録 ～「トンネルカメラトラップ法」の確立に向けて～. 日本哺乳類学会 2024 年度大会, 神戸. 2024 年 9 月. (ポスター)



野外でモグラの調査を行う様子



学会発表で発表賞を受賞

富山大学理学部同窓会 2024 年度（令和 6 年度）研究助成報告書

所属研究科・学環	持続可能社会創成学環
所属プログラム	グローバル SDGs プログラム
学 籍 番 号	
E-mail	
氏 名	三神 崇重
研 究 題 目 ※申請時と同じ題目としてください。	ベニズワイガニの生活史と環境変化に対する影響 の解明に向けた食性解析

【研究助成報告】

1. 研究背景と目的

ベニズワイガニは富山県を代表する水産資源の 1 つである。しかし、2024 年 1 月 1 日に発生した令和 6 年能登半島地震に起因する海底地すべりにより、地震前と比較して漁獲量や生息密度が減少していることが報告されている（Sanga et al., 2025 など）。今後の資源回復には、本種の生活史に基づいた漁業管理の実施が重要である。特に、本種の「食性」は、成長や繁殖といった生活史の根幹に関わる極めて重要な要素である。しかし、ベニズワイガニは水深 500 m 以深に生息する深海生物であるため、頻繁に生態調査を実施することが難しく、依然として、食性などの基礎的な生態学的知見は不足している。そこで本研究では、本種の生活史に基づいた漁業管理に向け、その基礎的知見である本種の食性解析を実施した。

2. 方法と結果

ベニズワイガニは、富山県水産研究所が富山湾中央部の水深約 1,100m にて 2024 年 7 月、2025 年 6 月および 7 月に採取した個体を用いた。本研究では詳細にベニズワイガニの食性を明らかにするために 3 つの手法（胃内容物調査、胃内容物 DNA 分析、炭素・窒素安定同位体比解析）を用いた。

富山湾に生息するベニズワイガニは小型二枚貝類や魚類を主に捕食していることが明らかとなった。特に魚類については、イワシ類、マサバ、キュウリエソといった表層から中深層に生息する種を捕食していることが確認された。このことから、本種は上層から沈降する魚類の死骸を捕食する、スカベンジャー（腐肉食者）としての側面を持つことが考えられた。

また、成長に伴う食性の変化も確認された。小型個体では、主に小型で取り扱いの容易な小型二枚貝類を捕食していた。一方、大型個体では、より大型の餌である表層魚類への依存度が高まるという、個体発生的な食性シフトが認められた。

以上の結果は、本種の生活史において、主要なエネルギー供給源が「海底由来」から「表層由来」へと劇的に移行することを示している。このことから、ベニズワイガニの資源状態は、生活史の各段階で異なる生態系の影響を受ける可能性が示唆された。すなわち、小型個体の時期には底生環境の変化が、大型個体の時期には表層生態系の変化が、それぞれの資源量や成育を大きく左右する要因となり得ると考えられる。

3. 助成金の活用と成果

本助成金は、主に①研究試料採取のための研究航海の乗船費や、②調査・分析の際に必要な消耗品および試薬の購入、などに活用することができた。

本助成金の支援により、令和 6 年能登半島地震以降に資源量が減少しているベニズワイガニについて、これまで不明確であった基礎的生態情報である「食性」を詳細に解明することができた。これにより、ベニズワイガニを取り巻く生態系構造が初めて体系的に示され、今後の資源回復策および管理方針の高度化に貢献し得る重要な知見が得られた。また、2025 年度水産海洋学会研究発表大会において本研究の成果を口頭発表した結果、若手優秀講演賞を受賞することができた。こうした大きな成果と貴重な経験は、本助成金により試料採取や分析を進めることができたことに支えられたものであるもので、心より深く感謝申し上げたい。

【論文発表・学会発表・その他実績】

発表年順（新しいものから）記入すること。ただし、本研究助成採択後のものに限る。

【論文発表】

【学会発表】

1. 三神崇重, 張勁, 三箇真弘, 稲村修, 胃内容物と同位体比から推定したベニズワイガニの成長に伴う食性変化, 2024 年度水産海洋学会研究発表大会, (2024 年 11 月 22 日～24 日, 静岡市, 口頭発表)
2. 三神崇重, 張勁, 三箇真弘, 稲村修, 胃内容物と同位体比から推定したベニズワイガニの成長に伴う食性の変化 (Stomach Contents and Stable Isotopes Reveal Dietary Shifts in Red Snow Crabs Across Body Sizes in Toyama Bay), Japan Geoscience Union Meeting 2025 (JpGU2025), (2025 年 5 月 25 日～30 日, 千葉市, ポスター発表)
3. 三神崇重, 張勁, 三箇真弘, 稲村修, 富山湾におけるベニズワイガニの食性解析 –胃内容物および安定同位体比に基づく評価–, 2025 年度水産海洋学会研究発表大会, (2025 年 10 月 31 日～11 月 2 日, 福井市, 口頭発表) **若手優秀講演賞受賞**
4. 三神崇重, 張勁, 三箇真弘, 稲村修, 胃内容物と $\delta^{13}\text{C}$ ・ $\delta^{15}\text{N}$ から推定した富山湾産ベニズワイガニの食性～海洋表層と深海生態系のつながり～, 第 15 回同位体環境学シンポジウム (2025 年 12 月 19 日, 京都市, ポスター発表)
5. 三神崇重, 張勁, 三箇真弘, 稲村修, 第 9 回富山湾研究会 (2026 年 3 月予定, 富山市, 口頭発表)

【その他実績】

1. 三神崇重, 大塚進平, 「令和 6 年能登半島地震が富山湾の深海食物網に及ぼす影響評価～ベニズワイガニの持続可能な漁業の在り方を探る～」, 令和 6 年度日本海学研究グループ支援事業, (獲得金額: 年 250 千円)
2. 三神崇重, 大塚進平, 「令和 6 年能登半島地震が富山湾の深海食物網に及ぼす影響評価～ベニズワイガニの持続可能な漁業の在り方を探る～」, 令和 7 年度日本海学研究グループ支援事業, (獲得金額: 年 250 千円)



ベニズワイガニの同位体比を測定している様子



2025 年度水産海洋学会研究発表会において
若手優秀講演賞を受賞した様子

2025 年（令和 7 年）度 役員・活動委員会・支部役員名簿 （2025.04.01）

理学部同窓会役員

- 顧問 平田 卓郎（化，1 回，S28=1953），北野 芳則（化，8 回，S35=1960）
川田 邦夫（物，14 回，S41=1966），西野 俊一（物，21 回，S48=1973）
石黒 幸男（化，21 回，S48=1973），高井 正三（物，21 回，S48=1973）
名誉会長 松田 恒平（理学部長）（生，33 回，S60=1985，院 S62=1987）
会長 水島 俊雄（物，22 回，S49=1974）
副会長 熊田 重勝（化，22 回，S49=1974），松永 豊（生，34 回，S61=1986）
上田 肇一（理学部副学部長）
幹事長 田中 大祐（生，38 回，H2=1990，院 H4=1992）
常任理事 池田 榮雄（数，24 回，S51=1976），佐藤 卓（生，25 回，S52=1977）
岩坪 美兼（生，26 回，S53=1978，院 S55=1980）副幹事長兼総務委員長
米谷 正広（地，29 回，S56=1981，院 S58=1983）
中田 哲也（化，31 回，S58=1983，院 S60=1985）組織強化委員長
大門 朗（化，32 回，S59=1984）
蒲池 浩之（生，37 回，H1=1989，院 H3=1991）広報委員長
岡田 知子（環，45 回，H9=1997，院 H11=1999）研究教育委員長
藤川 武命（物，54 回，H18=2006，院 H20=2008）事業委員長
学内理事 古田 高士（数学），上田 肇一（数理情報学），小林 かおり（物理学），柘植 清志（化学），
唐原 一郎（生物学），石井 博（自然環境科学）
監査委員 安江 健一（地，45 回，H9=1997，院 H11=1999），
中町 智哉（生，48 回，H12=2000，院 H14=2002）
中田 哲也（化，31 回，S58=1983，院 S60=1985）
大門 朗（化，32 回，S59=1984）組織強化委員長
蒲池 浩之（生，37 回，H1=1989，院 H3=1991）広報委員長
岡田 知子（環，45 回，H9=1997，院 H11=1999）研究教育委員長
藤川 武命（物，54 回，H18=2006，院 H20=2008）事業委員長
学内理事 菊池 万里（数学），菊池 万里（数理情報学），森脇 喜紀（物理学），林 直人（化学）
若杉 達也（生物学），堀川 恵司（自然環境科学）
監査委員 安江 健一（地，45 回，H9=1997，院 H11=1999）
中町 智哉（生，48 回，H12=2000，院 H14=2002）

活動委員会委員名簿

活動委員会名称	○委員長 委員
総務委員会	○岩坪 美兼（生，S53），酒徳 昭宏（環，H19）
事業委員会	○藤川 武命（物，H18），田中 大祐（生，H2），佐藤 卓（生，S52）
広報委員会	○蒲池 浩之（生，H1），中村 幸絵（化，H20），荒木 敏勝（化，H7），玉置 大介（生，H16）
組織強化委員会	○中田 哲也（化，S58），大門 朗（化，S59）
研究教育委員会	○岡田 知子（環，H9），米谷 正広（地，S56），佐藤 杏子（生，H15）

富山支部役員 2025 年度

- 支部顧問 小川 清美（化 8，S35=1960），高井 正三（物 21，S48=1973），
水島 俊雄（物 22，S49=1974）
支部長 熊田 重勝（化 22，S49=1974）
副支部長 松永 豊（生 34，S61=1986），木戸 瑞佳（地 41，H5=1993，院 H7=1995）
支部幹事長 大門 朗（3 化 32，S59=1984）
支部幹事 金岡 一孝（数 30，S57=1982），大野 麻波（数 38，H2=1990）
藤川 武命（物 54，H18=2006，院 H20=2008），佐藤 卓（生 25，S52=1977，院 S54=1979），
中田 哲也（化 31，S58=1983，院 S60=1985），沖野 寿幸（化 40，H4=1992，院 H6=1994），
岡田 知子（環 45，H9=1997，院 H11=1999）
支部監査 副支部長が代行

関東支部役員 2025 年度

支部長 藤森 洋行（物 36, S63=1988, 院 H2=1990）
副支部長 小島 由樹（物 31, S58=1983, 院 S60=1985）
支部幹事長 下田 弘（化 8, S35=1960）
支部幹事 浦山 茂（物 12, S39=1964）, 小山 哲朗（化 13, S40=1965）, 高橋 亨（地 30, S57=1982）,
宮崎 政志（物 32, S59=1984）, 杉山 弘（物 33, S60=1985）, 谷口 泰弘（物 36, S63=1988）
支部監査 副支部長が代行

2024 年度（令和 6 年度）決算報告・会計監査報告

2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日

■一般会計

【収入の部】（単位：円）

費 目	予算額	決算額	差引額*1
入会金	3,600,000	3,580,000	△ 20,000
年会費前受金	412,000	412,000	0
年会費	200,000	202,000	2,000
寄付金	450,000	330,000	△ 120,000
特別会計より組入	0	0	0
懇親会費預り金	300,000	147,000	△ 153,000
預金利息	30	947	917
雑収入	876	0	△ 876
前年度繰越金	1,403,094	1,403,094	0
計	6,366,000	6,075,041	△ 290,959

*1（決算－予算）

【支出の部】（単位：円）

費 目	予算額	決算額	差引額
事務費	357,000	374,815	17,815
備品費	0	67,309	67,309
広報関係費	1,420,000	1,277,098	△ 142,902
事業費	400,000	330,478	△ 69,522
理学部研究補助基金	500,000	425,000	△ 75,000
支部事業費	150,000	150,000	0
会議費	400,000	281,360	△ 118,640
人件費	950,000	1,024,715	74,715
卒業式支援費	550,000	308,123	△ 241,877
分担金	70,000	65,900	△ 4,100
特別会計	210,000	210,000	0
予備費	1,359,000	0	△ 1,359,000
計	6,366,000	4,514,798	△ 1,851,202

差引残高＝収入額－支出額＝6,075,041円－4,514,798円＝1,560,243円 は次年度へ繰り越し

■特別会計

【収入の部】（単位：円）

費 目	予算額	決算額	差引額
前年度繰越金	3,380,502	3,380,502	0
利息	40	4,085	4,045
一般会計から組入	210,000	210,000	0
計	3,590,542	3,594,587	4,045

【支出の部】（単位：円）

費 目	予算額	決算額	差引額
名簿作成費	0	0	0
記念事業費	0	0	0
退職準備金	0	0	0
新事業準備基金	0	0	0
予備費	0	0	0
計	0	0	0

差引残高＝3,594,587円は次年度へ繰り越し

■年会費会計

（単位：円）

費 目	収入の部	支出の部	差引額
前年度繰越金	4,288,000	0	4,288,000
年会費	1,118,000	614,000	504,000
計	5,406,000	614,000	4,792,000

4,792,000円は次年度へ繰り越し



～年会費納入状況の表示方法が変わりました～

年会費の納入状況を確認する方法 年会費の納入状況は宛名部分の印字で確認できます。

◆年会費納入対象の方

()	括弧内が空欄の方は年会費の納入対象の方です。
([A] / [B] - [C])	[A] は累計何年分が納入済みかを表します。 累計 25 年分の年会費を納入すると終身となります。 [B] - [C] は直近の納入状況を表します。 [B] は年度を、[C] は何年分かを表します。 また、[A] は [C] を含みます。 例) (5/24-2) は、累計 5 年分納入済で、2024 年度に 2 年分、つまり 2024 年度分と 2025 年度分の年会費を納入したことを意味します。

◆年会費納入対象外の方 括弧内に※が付いている方または (－) の方は納入対象外です。

([A] / [B] - [C] ※)	納入状況の確認方法は上記と同様。 複数年分を前納したことで、本年度分の年会費が納入済となっている方は納入対象外で、括弧内に※が付いています。 例) (13/25-10※) は、累計 13 年分納入済で、2025 年度に 10 年分、つまり 2034 年度分までの年会費を納入したことを意味します。次に納入対象となるのは 2035 年度です。
(25/終身※)	終身の年会費を納入された方です。
(－)	年会費納入の対象ではありません。(準会員、特別会員等)

※年会費について、詳しくは「富山大学理学部同窓会年会費集金に関する規則」を参照してください。

※2026 年 4 月～2027 年 3 月末までに納入された年会費は、2026 年度分の年会費となります。

※納入履歴を詳しく知りたいなどのお問合せは事務局までご連絡ください。

●学生海外留学支援事業 留学体験記

所 属：理学部 理学科 2年
名 前：川田 真央
留学先：マレーシア
留学先機関名：UTARトウルク・アブドール・ラーマン大学)



この度は、富山大学基金による海外研修支援をいただき、ありがとうございました。私たちは、理学部国際コースとして、5週間の海外研修に参加し、主にトウルク・アブドール・ラーマン大学で授業を受講しました。

研修前半は、発音や語彙など英語の基礎学習に加え、短編映画の要約やVlog制作などに取り組み、英語で考え、伝える力を養いました。また、宗教や地域ごとに異なる文化についてプレゼンテーションを行い、多文化社会への理解を深めることができました。

研修後半では、生物多様性や環境問題などを英語で学びました。マングローブ林での野外研修やテラピンの保護施設訪問を通して、熱帯地域特有の生態系や環境保全の重要性について理解を深めました。

授業外では孤児院訪問や民族文化体験、さらにサンウェイ大学やモナッシュ大学を見学し、現地の価値観に触れるとともに、今後の留学への意欲も高まりました。



マングローブ林での野外研修の様子



民族文化体験の様子

今回の海外研修は、多様な価値観に触れることができる貴重な経験となりました。今後もこの経験を活かし、積極的に英語学習に取り組んでいきたいと思います。

●夏季オンライン英語研修プログラム支援事業 留学体験記

所 属：工学部 工学科 1年
名 前：松浦 楓
留学先：フィリピン
留学先機関名：アテネオ マニラ大学



この度は、富山大学基金の夏季オンライン英語研修プログラムに参加する機会をいただき、ありがとうございました。

私はオンライン形式で、現地の先生と富山大学の学生の皆さんと一緒に、10日間の授業に参加しました。授業では、ライティング・リーディング・スピーキング・リスニングの4技能を使った演習に加え、ロールプレイやディスカッションが中心で、毎回楽しく学ぶことができました。

もともと人と話すことが好きで、自分の英語コミュニケーション能力を高めたいと思い参加しましたが、本当に参加してよかったと感じています。学年や学部の違い仲間と英語で意見を交わす経験は新鮮で、英語で伝えることの面白さと難しさの両方を実感しました。

この研修を通して、より海外に興味を持ち、もっと世界を見たいと感じたため今年の3月にはフランス研修に参加することを決めました。今後も、さまざまな人と交流し、より自分の視野を広げていきたいです。貴重な機会を本当にありがとうございました。



オンライン授業の様子



●課外活動施設支援事業 (五福キャンパス テニスコートLED 投光器 改修事業)

令和7年10月1日に富山大学統合20周年記念事業に伴い、企業様からの寄附を用いて学生活動の支援および節電事業の促進を目的に、五福キャンパス テニスコート投光器(LED)の一部改修に活用させていただきます。改修時期は令和8年夏頃に実施予定です。



●令和7年度学部1年次生短期海外派遣プログラム支援事業

富山大学では、教育における戦略の1つとしてグローバル人材の養成を掲げています。「学部1年次学生の短期海外英語研修」は、教養教育院で修得した語学力により、短期海外英語研修において高度な知識や諸外国の習慣を身につけさせ、広い国際的視野をもって学部専門教育における学修につなぐことを目的で実施しています。令和8年2・3月に、2週間から4週間の短期海外派遣プログラムを実施し、参加費の一部を富山大学基金から支援しました。研修先は、ニュージーランド オークランド大学（10名）、マレーシア トウンク アブドゥル ラーマン大学（25名）、台湾 開南大学（25名）、オーストラリア アデレード大学（10名）1年生70名が短期海外英語研修に参加しました。

令和8年4月15日に帰国報告会が開催され、プログラム参加学生のうち4名が発表し、それぞれニュージーランド、マレーシア、台湾、オーストラリアでの研修内容、グループワークでの意見交換・発表、ホストファミリーや学生サポーターの人の温かさや優しさ、キャンパス周辺や町の雰囲気などの感想を述べました。また、質疑応答では、申し込み手続き、語学力の向上・維持について質問があり新1年生の関心の高さがうかがえました。



●Giving Campaign 2025を通じて約12,000票の応援、約210万円の寄附金を創出

富山大学では、学生の研究活動や課外活動の応援・支援を目的に、学生団体による活動資金調達を行うイベント「Toyama University Giving Campaign 2025」を令和7年10月10日～19日まで参加し、12,000票の応援、約210万円の寄附を得ました。

同キャンペーンには2024年から参加し昨年は2回目となります。参加する学生団体等は自分たちの活動等の情報発信を行い、企業、卒業生、ご家族、友人からの応援・支援を受け、寄附金を団体活動資金として活用しています。

Giving Campaign 2026にも参加いたしますので、学生団体への応援・寄附のご協力をお願いします。 今年度開催日程：2026.10.16(金)～25(日)



●寄附者様ご芳名一覧(令和7年10月～令和8年3月)

寄附者のご芳名は五福キャンパス事務局棟玄関フロア及び富山大学基金ウェブサイトでもご紹介しております。

【個人】(50音順にて記載)

浅井 岳晃 阿部 柊真 上坂 真穂 遠藤 俊郎 齋藤 滋 新宮 靖広 杉浦 吉治 鈴木 啓之 高木 繁雄 谷口 祐樹 寺垣 隆志 戸田 英樹
中 茂樹 長坂 保彦 長津 輝彦 中野 繁章 萩原 新之介 林 正人 伏喜 俊至 水野 真理子 山田 勉 (ほか公表辞退 20名)

【企業・法人等】

株式会社インテック オークス株式会社 株式会社北日本新聞社 サカキ産業株式会社 三耐保温株式会社 三和ボーリング株式会社
塩野フィネス株式会社 立山化成株式会社 株式会社チューエツ 一般社団法人富山県農業連合会 富山大学生生活協同組合
富山大学同窓会連合会 長瀬ランダウ株式会社 日本海ガス絆ホールディングス株式会社 株式会社日本空調北陸
株式会社ハマデン 株式会社ビートブ 北陸コンサルタント株式会社 一般財団法人 立仁会 (ほか公表辞退 2社)

●富山大学基金の寄附受入状況

受入期間：令和7年10月～令和8年3月末

寄附の種類	寄附件数	寄附金
富山大学基金(一般)	49件	9,559,372円
うちリサイクル募金	2件	5,795円
修学支援基金	14件	1,297,500円
研究等支援基金	7件	275,400円
合 計	70件	11,132,272円

●富山大学、メルマガはじめました！



毎月、富山大学の
最新情報をお届けします。

お問い合わせ先：富山大学総務部総務課広報・基金室(基金担当)

〒930-8555 富山市五福3190 Tel. 076-445-6178 Fax. 076-445-6063

E-mail: kikin@adm.u-toyama.ac.jp URL: https://tomidaikikin.adm.u-toyama.ac.jp



information

異動先・お名前の変更のご連絡を

同窓会報は現住所あてに送付しておりますが、現住所が不明な場合は返送されてきます。このようなことはできる限り回避したいので、ご住所が変わったり、お名前が変わった場合は、**異動届ハガキ**にてお知らせください。



注意してください

富山大学理学部同窓会では、**株式会社サルト**においてのみ名簿を委託しております。それ以外の名簿作成や商品販売は一切行っておりません。

また会員以外の方への会員名簿配布および販売はしておりません。

不審な電話やハガキなどを受けられた場合は、お手数でも本会事務局までご連絡ください。

異動届ハガキ (変更・訂正)

1. 切り取り線（実線）に沿ってハサミで切り取ってください。
2. ハガキになるように点線で折ってください。
3. のりしろに、はみ出さないようにのり付けし、貼り合わせてください。

※氏名、学科等の太枠欄は必ず記入してください。

切り取り線



のりしろ

のりしろ

のりしろ

切り取り線
↓

異動届

記入日

西暦

年

月

日

ふりがな

ふりがな

氏名

旧姓

ID

ID：郵便物宛名ラベルの氏名下段に記載 00-0000-00000000

学科・プログラム

卒年・回

年卒

卒回

現住所・TEL

TEL： ()

E-mail

【勤務先情報】

勤務先名

(役職)

勤務先住所・TEL

TEL： ()

勤務先 E-mail

【物故連絡】

逝去年月日

年

月

日

連絡者氏名

(本人との続柄)

連絡者住所・TEL

TEL： ()

遺族住所

【通信欄】



郵便はがき

料金受取人払郵便

9300190

富山西局
承認

223

(受取人)

差出有効期間

富山市五福3190

2028年6月

富山大学理学部内

9日まで

富山大学理学部同窓会 雪紋 行



『令和7年度学位記授与式の一コマ、2026年3月24日、ボルファートとやま』



編集後記

このたびは同窓会報の発行にあたり、ご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。世界に目を向ければ、戦争や国際情勢の緊張が続く中、私たちの日常も決して無関係ではありません。また、昨今のAI技術の急速な発展は、社会や働き方に大きな変化をもたらしています。このような時代だからこそ、人と人とのつながりの大切さを改めて感じるところです。雪紋会が今後も世代を超えた交流の場として発展するよう、引き続き皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

理学部同窓会報編集委員会（広報委員会）

蒲池浩之（37生）、中村幸絵（56化）

荒木敏勝（43化）、玉置 大介（52生）

雪紋 vol.45

富山大学理学部同窓会報 2026

発行：令和8年6月20日

編集・発行：富山大学理学部同窓会 雪紋

〒930-8555 富山県富山市五福 3190

富山大学理学部2号館 B305

電話（076）411-4803

印刷：株式会社なかに印刷

〒939-2741 富山市婦中町中名 1554-2

電話（076）465-2341

富山大学アルムナイプラットフォーム



↑登録はこちらから！↑

同窓生がオンラインで交流できるプラットフォームです！

イベント情報やコミュニティ参加を通じて様々な分野の方と出会い、

富山大学の絆をより強く、より広く。

ぜひ、みなさまのご登録お待ちしております！！

管理者：富山大学総務部総務課広報・基金室

email：kouhou@u-toyama.ac.jp

QRコードが読み込めない場合には、以下よりアクセスしてください。

<https://www.u-toyama.ac.jp/outline/pr/alumni/>

交流プラットフォーム（コミュニティ・イベント・メッセージ・プッシュ通知といった機能を搭載）



登録方法

STEP 1

QRコードを読み込み
登録ページにアクセス！



STEP 2

登録フォームに
必要事項を入力し送信！
招待メールが配信されます



STEP 3

招待メールから
本登録URLにアクセスすると
登録完了！



STEP 4

登録完了！



富山大学理学部同窓会報

雪 紋

Vol. 45
